

・コペルニクスの春休み

ラフソデー

地球歴2690年、人類は既にその活動範囲を地球から数百光年の宇宙にまで広げていた。こうした変化の大きな環境や、高度に電子化された様々な社会的インフラストラクチャ、そしてシステムを人類の活動と自らを、より密接に融合させるため、人類はその進化の過程を自ら制御することを決断していた。いまや人の遺伝子には、人自身が作り出した多くの遺伝子コンポーネントが組み込まれ、親から子へと受け継がれている。とりわけ、インターフェイスコンポーネントと呼ばれるものは、人間が本来持つ五感を拡張し、外部の電子機器との間で直接的なコミュニケーションを可能とするものだ。これによって実現される電子的な拡張現実(AR)は、人の生活や活動において不可欠なものとなっている。つまり、大昔の人たちが行っていた、ディスプレイを見ながらキーボードやボタンを操作するという作業は、物理的な操作から、仮想もしくは拡張現実によるコミュニケーションに変わり、その精度や速度が大幅に改善されている。たとえば、日常生活で使う多くの機器の操作も、汎用の家庭製品用インターフェイスによる拡張現実を使って行われるし、今ではほとんど自動運転の車を、郊外でマニュアル運転するような場合に使われるVDI(バーチャル・ドライビング・インターフェイス)さらには航空機や宇宙船を操縦するためのVPI(バーチャル・パイロット・インターフェイス)のようなものだ。ただ、いくつかの理由から、これらはいくつかでも人間がもともと行っていた物理的な動きを仮想現実置き換えたという域を出ていない。つまり、念じれば動くといった、いわゆる超能力みたいなものではなく、あくまで、実際の動きを仮想化したものなのである。もちろん技術的なハードルもあるのだが、それ以上に人間自身が雑念を完全に払えないため、こうした抽象的な思考による操作は、常に誤動作の危険をはらむ。そういう意味では、どれだけ遺伝子工学が進歩しても、人格、つまり人としての本質は変わっていないのである。一方で、こうしたインターフェイスを経由して、人体の様々な情報を取り出し、健康状態を調べたり、それらをフィードバックしたりする技術も発展している。これらは、VMI(バーチャル・メデイカル・インターフェイス)と総称されている。

恒星間航行を含む宇宙航行が不可欠になった現在、宇宙船の運航に不可欠な人材を育成する役目を担っているのが、スペースアカデミーである。アカデミー本校は、地球から太陽と反対方向に150万Kmほどの位置にあるL2ステーションと呼ばれる巨大な宇宙都市に置かれている。第2ラグランジュ点(L2)として知られるこの位置は、太陽と地球の引力に加えて軌道の遠心力がバランスするため、そこにある物体は常に地球、太陽との相対位置が変わらない。つまり、こうした宇宙都市を建設するのに最適の場所なのである。

教育機関としてのアカデミーは、一般の高校教育にあたる基礎過程から大学レベルの専門課

程、そして最先端の研究テーマに取り組む研究過程までの一貫教育校だ。そこでは、通常の高等教育に加えて、宇宙船のクルーとして必要になる様々な訓練が並行して行われる。基礎過程の二年目からは、実際にクルーを組んで小型の宇宙艇を飛ばす訓練も実施される。ここで、基本的な操船やそれに付随するいくつかの役割について基本を学んだ後、実際に役割ごとの専門課程に進んで、より実践的な教育を受けることになる。基礎過程は、一般の高校教育を兼ねており、どちらかといえば、そちらが主体であることから、附属高とも呼ばれている。

この物語は、そんな附属高に学ぶ学生たちの、ひとつのエピソードである。

「ねえ、起きなさいってば……」

そう言うと、美空は隣の席に座っている男子生徒の頬をつねった。

「ん……、もう少し寝かせてくれよ、昨日はほとんど寝てないんだから」

アカデミー附属高の制服を着た、この男子の名前はデイビッド・ムラカミ、仲間内ではデИБで通っている。

「ほら、もう到着するよ。起きろ！」

星野美空、彼女もアカデミー附属高の二年生。もうすぐ三年に進級する前の休暇に、仲間たちとの月旅行を計画したのも彼女である。

「まだ寝てるのか、しょうがないなデИБは」

前の席から身を乗り出して、そう言ったのは、やはり同級生のアンリだ。アンリ・ガブリエル。選りすぐりの学生ばかりのアカデミー附属高で常にトップランクの成績を誇る秀才、いや天才である。彼は専門課程では研究部門に進んで遺伝子工学の研究をすることになるだろう、というのがもっぱらの噂である。基礎課程の学生ながら、彼が書いた論文は学会でも注目を集めるほどの逸材だ。

そうしている間に、彼らが乗ったシャトルは降下を始め、窓からはクレーターだらけの月面が見え始めた。到着前のアナウンスの後、頭上のベルトサインが点灯する。ベルトサインと言っても、これは古来の伝統を踏襲しているにすぎず、もはやシートベルトなどという代物は、非常時を除いて使われることはない。かわって使われているのが、周囲の空間が物体に及ぼす粘性、つまり慣性を制御することで、体をシートに固定するシートホールド装置である。これは、数百年前に発見されたヒッグス粒子の研究の産物だ。同様に、今、彼らを感じている機内の人工重力もその応用である。さらには、惑星間や外宇宙を航行する宇宙船が備えている重力エンジンから、ビルの昇降シャフトまで、すべて同じ原理で作り上げられている。加速や軌道変更に伴う加速度、いわゆるGも同じ原理で制御されている。重力エンジン以外の動力に頼る乗り物でもほとんどGを感じないのはこの慣性制御のおかげだ、

シートホルド装置が働くと、体がやんわりとシートに抱きかかえられたような感覚になる。優しい感覚だが、それでいて体を動かそうとすると、しっかり固定されていて、自由はきかない。緊急時は瞬時に体全体に制御がかかるので、数百Gの加速度でも、物理的な破壊が起きない限りは怪我すらしない。ただ、そんな事態は衝突か墜落しかなさそうだから、その時点でシートホルド装置の役目を越えてしまっているのだが。

「もう到着か。早いな。本一冊読む暇もないなんて・・・」

そう言いながら、読んでいた本をシートポケットにしまったのは、アンリの隣に座っているフランクである。フランク・リーブス、彼も仲間のひとり。パイロット課程を目指す彼も、成績ではアンリにひけをとらない。得意としている分野は宇宙物理学である。将来、宇宙船乗りか、物理学者かで目下進路を悩んでいるところだ。

「サラウンドにしてごらんよ。そろそろ真下にケプラーが見えるわよ」

そう言うのは、サラ・ホイットニー。通信と情報収集を専門とするC&I（コミュニケーション&インテリジェンス）を指しているが、その情報処理能力には教師も舌を巻く。多くの情報から状況を推定して判断を下すスピードは神がかりとも言われるほどだ。ただ、少し性格的におおざっぱなのが玉に瑕である。

「嵐の大洋だね、マリウス丘のクレーター群も見えるよ」

美空が言う。ちなみに、サラウンドというのは、拡張視覚インターフェイスの、いわゆるサラウンドモードビューのことで、船の外部映像や各種のセンサー画像を直接イメージとして意識に投影する視覚インターフェイスのことである。人間の視覚は目で見えている範囲に限られるが、サラウンドモードでは上下や背後も含めて、すべての方向の状態を把握できる。不思議に思うかもしれないが、人間の脳内には実は全周マップと呼ばれるしくみが存在する。五感の情報は最終的には統合され、この全周マップに投影される。たとえば、音や皮膚感覚で、それが背後からの物であっても、その位置を認識できるのは、この全周マップがあるからだ。サラウンドモードでは、この全周マップに直接、全方向の映像を投影する。その感覚は不思議だ。背後も含め、すべての方向が同時に見えるのである。自分が鳥に、いや神様にでもなったような気持ちになる。

シャトルは次第に高度を下げ、嵐の大洋を横切って、特徴的なケプラークレーターの真上を飛び越える。やがて、差し渡しが100Kmはある巨大なクレーター、コペルニクスの縁をかすめ、その中央にある月面都市の宇宙港への最終アプローチを開始するのである。

軽いショックがあつて、速度がぐつと落ちてくる。宇宙港からの指向性磁場がシャトルをとらえたのだろう。地球静止軌道ステーションや、地球近傍のラグランジュ点(L1、L2)などにある宇宙都市と月を結ぶ航路を飛ぶ小型のシャトルは、一般に、ごく小さなエンジンしか持たない。ステーションや宇宙港にある射出用電磁カタパルト、いわゆるマスドライバーと、さらに、これらから放射される指向性の加速磁場によって十分な速度を与えられるため、非常時以外、自力で行うのはコースの微調整のみだからである。航路の切り替えも、様々な軌道面に配置された加速ステーションからの指向性磁場と機体が発生する誘導磁場の相互作用によって行われ、最後に、到着地からの指向性磁場で減速、誘導されて着陸する。実際、アカデミーのあるL2ステーションを出発したこのシャトルも、月公転軌道面にあるいくつかのステーションを使って軌道変更をした後に、月軌道上のステーションを経由してコペルニクス宇宙港への着陸コースに乗ったわけだ。

機外には荒涼とした景色が広がり、もうシャトルの高度より高くなったコペルニクスの外縁が山脈のようにそびえ立っている。

「当機は、まもなくコペルニクス宇宙港に到着いたします。なお、着陸時のサラウンドモードの使用で気分が悪くなる場合がございます。サラウンドモードご利用中のお客様は十分ご注意ください」

着陸前の機内アナウンスからほどなく、シャトルは宇宙港の到着デッキに滑り込む。この時点でもまだ、かなりの速度を保っているの、サラウンドモードではちよつと目が回る。数百メートルのトンネルを進む間にシャトルは磁場によって一気に減速され、それから誘導路に沿って搭乗ゲートまで移動する。

シャトルがゲートに到着すると、周囲がエアシールドで覆われ、空気が満たされる。その後、ボーディングブリッジが船体に接続され、ドアが開かれる。このあたりの様子は昔の飛行機と大きくは変わらない。月面のような衛星や惑星表面にある宇宙港に大型船が着陸することはほとんどない。大型船は、軌道上の宇宙都市にある宇宙港を発着し、それらの乗客や貨物は小型シャトルや、マスドライバーを使って地上と行き来するのである。



月面施設の多くは地下に作られている。これは、太陽や宇宙からの放射線を避けるためだ。軌道上の宇宙都市の放射線防護は強化シールドと磁気防御にたよっているが、月面のような場所では、建設コストがかかる強化シールドよりも、天然の地殻を遮蔽のために使った方が効率がいいのである。眺望や採光のため、所々に、露天掘りで作られた場所もあり、その天井は宇宙都市同様に、透明度が変化する強化シールドで覆われている。月の重力は本来、地球の六分の一だが、慣れないと危険な上、長期滞在者は体力低下などの問題もあるため、人工重力を加えて地球並みにしてある。これは特殊なものを除き、太陽系内にある施設に共通の仕様だ。

コペルニクスコロニーは、ティココロニーと並ぶ月面最大の都市のひとつである。居住人口は500万人、地球圏の中でも大きな経済拠点であると同時に、その周辺はリゾート地域になっていて、多くの観光客を集めている。

「うわー、やっぱりすごい人だね。」

ゲートを出たところで、アンリ。

「なに田舎者みたいなこと言ってるのよ。これくらい、地球の大都市に比べたらかわいいもんじゃない」

と美空。

「まだ先があるんだから、急ぐわよ。もたもたしていると最終のルナトレインに乗り遅れるんだからね」

「はいはい。先導よろしく」

美空が先頭をきって歩き出す。アンリ、フランク、サラ、そして、まだ眠そうなデイブが続く。ルナトレインは宇宙港と短・中距離のエリアを結ぶリニアモーターの鉄道路線だ。真空の地下トンネルを進むこの列車の最大速度は、シャトルにも匹敵する。宇宙港がある中核都市周辺とそこから2〜3000Kmくらいまでの距離は、この鉄道が最短1時間程度でカバーして

いるのである。彼らが乗る予定のコペルニクス周辺エリア内のローカル線も同じ駅を発着している。

「ウエスト・リム方面の出発はこっちなね」

美空がアウトバンドの案内表示を見ながら言う。アウトバンドというのは、音や光を使って、直接データを受信するインターフェイスの総称である。通常の視覚や聴覚に必要な音や光の波長域は限られている。音ならば、可聴域よりさらに短い波長の超音波領域、視覚ならば可視光の上下にある赤外、紫外領域の光をデータ伝送に使用するのがアウトバンドである。視覚や聴覚はその領域の音や光を感じられるように拡張されているが、それらは光や音としてではなく、データとしてデコードされ、その内容に応じて必要な神経系に直接渡される。通常の知覚範囲の外側を使うので、アウト・オブ・バンド、略してアウトバンドと呼ぶのである。この場合、コンコースにあるアウトバンド送信機から送信される赤外光領域の信号を使って流れてくる場内マップ情報を、案内板のイメージで拡張現実として見ることができるのである。ちなみに、さらに多くの情報が必要とする、たとえばサラウンドモードビューなどは、直接、人間の神経系に電氣的に情報を送り込むダイレクト・インターフェイス、略してDIが使われる。超高速の無線ネットワークと、遺伝子操作で作られている体表面のインターフェイスポイントを接続する装置がDIユニットである。インターフェイスポイントは自由に、と言っても、本人が生まれる前の親の自由というのが正しいのだが、体のどこにでも作ることもできる。標準仕様では、左右の手首付近で、この場合、DIユニットは昔の腕時計やブレスレットの形をしたものが使われる。オプションでは、ネックレスやピアスのようなものも作ることができるが、かなり高価なものになる。

「ちょっと待って。そっちは混雑してるみたい。この先からショートカットできるよ」

案内に沿って歩いて行こうとする美空をサラが引き留めた。C&Iである彼女が扱える情報量は多い。混雑情報や、一般には公開されていない情報をもとに近道を割り出したらしい。ちなみにアウトバンドやDIは、いわば通信路であり、それを使って様々な情報源に接続する機能は個別に実装されている。これらの機能は単にインターフェイスと総称される。一般にC&Iを志望する学生の場合、一般の学生よりも多くのインターフェイスを持っている。これは、親たちが持っている機能を受け継いだり、そうした進路も選択肢と考えて生まれる前に与えられたものだ。パイロット志望の学生が持つVPI、つまり仮想パイロット・インターフェイスも同様だ。このインターフェイスは様々な宇宙船や宇宙機、航空機の操縦に必要な機能との接続を提供する。またメデイカル系の学生は、仮想メデイカルインターフェイス、VMIを経由

して、人の生体情報にアクセスできる。これによって、病気や患者の状態を直接把握できるのだ。インターフェイスは特定の部分にある細胞に遺伝子を外から導入することで、後天的にも獲得できるが、高価な上に子供に受け継げない一代限りの機能になってしまう。

「サンキュー。助かるよ」

「持つべきものは、気の利いたC&Iの友達だな」

フランクが言う。五人は、少し先にある細い通路に入る。人通りはまったくくない。

「なんか、薄暗いよ、大丈夫？」

「ちよつと狭いけど、一応、駅までは抜けてる・・・はずよ」

美空は不安そうだが、サラはそう言うと、自分が先頭に立って歩き始める。だが、角をいくつか曲がった後、彼らの前に、閉ざされたドアが立ちはだかった。

「あれ、こんな所にドア？ マップには書いてないのに」

サラはそう言ううちよつと考え込む。

「開かないのかな、このドア」

アンリがドアを調べるが、開閉操作ができそうなパネルはどこにも見当たらない。

「自動制御の非常ドアみたいだね。ここからじゃ操作はできなさそうだよ」

アンリが、まいったという感じで言う。どうやら行き止まりっぽい。

「えー、ここまで一本道だったし、また戻るしかないってわけ？」

「うーん、ごめん。それしかないかも」

「サラったらあ、裏道探しいいけど、もうちよつとよく調べなさいよね。それじゃ、C&I失格よ！」

美空はちよつとふくれっ面だ。

「戻るなら急がないと時間が無いぞ」

フランクが言う。元の道に戻って混雑した中を駆まで行くとすれば、もう最終列車ぎりぎりである。

「しょうがないな、急いで戻るよ」

と美空は振り向いて行こうとする。

「ちょっと待てよ」

「何よ、ダイブ。時間が無いって言ってるじゃない。あんた、まだ寝ぼけてるわけ？」

「まあ、まてよ……。多分、こうすれば……」

ダイブがそう言うと、いきなりドアが開いた。

「開いた？ ダイブ、あんたどんな魔法使ったのよ？」

美空が驚いて言う。

「あー、やっちゃったわけね」

と、サラ。

「やっちゃった……って、お前、まさか、また？」

「これ、バレたらまずいんじゃない……」

フランクとアンリも声を揃える。どうやらダイブは、この区画の制御システムに割り込んでドアを開けてしまったらしい。わかりやすく言えば、ドアを制御しているシステムをハッキングしたということである。ダイブはナビゲーター志望ののだが、コンピューターシステムにもやたらと詳しい。ゲーセンでも裏技の達人で、とりわけ格闘物では負け知らずだ。だが、公共のシステムをハッキングしたということになると、これはちよつとマズいわけで……

「あんたねー、ほら、逃げるよ!」

と言うなり、美空がドアを抜けて走り出したので、それに引っ張られて全員が走り出した。

「なんで、逃げないといけないのよ、これじゃ全員同罪じゃないの」

サラが走りながら叫ぶ。

「黙って走りなさいよね。そもそも、あんたが裏道なんて探すから・・・」

「そんなこと・・・、あ、そこを右！」

文句を言いながらも、サラは方向を指示している。入り組んだ通路をしばらく走ると、先に広場が見えてきた。

「そこが駅の西口広場よ」

5人は通路から広場に飛び出す。

「ふう、どうにか出られたみたいだね」

「まったく、冷や汗かいたぞ」

アンリとフランクはかなりバテた様子だ。そう言う意味では、この秀才二人よりも女子たちのほうが体力はありそうな感じがする。

「いやあ、まさかあんなに簡単に開くとは・・・」

ダイブが頭をかきながら言う。

「こら、デブ！ 全部あんたのせいだからね、ちょっとは反省しなさいよ。うまく逃げられたからよかったけど・・・」

美空がダイブをにらみつけて言う。デブ、初対面の時に美空は彼をそう呼んで笑った。そう呼ばれる意味が最初ダイブにはわからなかった。それが、美空の郷里の古い言葉で「太っちょ」を意味することを知ったのは後のことである。図体はたしかにデカイダイブだが、この呼び名にはちよつと理不尽さを感じている。

「その呼び方はやめろつて。まあ、とにかく無事にここまで来られたんだからいいじゃないか。実際、かなり早く着けたみたいだし」

「あ、．．．あのね、どうも、そううまくは．．．」

サラがそう言う脇で太い声をした。

「君たち！、ちよつといいかな」

「はい？．．．」

「え？．．．」

「あっ．．．」

「．．．．．」

見るとセキュリティと書いた制服を着た大男が二人。この時点で5人は、ようやく現実を悟った次第である。



それから5人は駅のオフィスに連れて行かれて、たっぷりお説教を食らったわけだ。旅行者、しかも学生ということで、お説教と始末書ですんだのは不幸中の幸いと言えるのだろうが、ようやく解放された頃には、すっかり全員うちひしがれていた。

「結局、乗る予定の列車には乗り遅れちゃったねえ。どうしよっか」

「あんたねえ、それはいったい誰のせい？」

サラに美空が突っ込むのだが・・・

「そりゃ、はっきりしてるんじゃない？ねえ、ムラカミくん」

「いや、悪い、悪かったよ」

「このデブが悪いのははっきりしてるけど、そもそも裏道なんか通らなきゃ、つてのもあるわよねえ」

「もうやめようよ。どのみち僕らは一蓮托生なんだしさ」

ちよつと雲行きが怪しくなってきたところで、アンリが口をはさむ。

「そうそう。まず、これからどうするかを考えるのが先じゃないか？」

フランクもおさえ役にまわる。たしかに、ここで言い争ってもしかたがない。なんとか、目的地のホテルまでたどり着かないことには、ここで野宿するハメになる。

「もう最終列車は出ちゃったのかな？」

と、アンリ。

「ちよつと駅のオフィスで聞いてくるよ。ここで待っててくれ」

デιβはそう言うと、駅の方へ走って行く。ちよつと責任を感じているようだ。

「デιβ、結構気にしてるみたいだな」

フランクが言う。

「当然よ。誰のせいでこんなことに？ 今夜のディナーはディブの奢りよね」

美空はかなり不機嫌そう。経験上、こうなった美空はあまり刺激しない方がいい。なだめるつもりが、逆に怒りを煽ってしまう可能性もあるからだ。それは全員心得ているので、誰もそこは突っ込まない。そうこうしている間にディブが小走りに戻ってきた。

「よかった。到着便に遅れが出ているみたいで、このあと臨時列車が一本あるらしい。発車は30分後だつて」

「そりゃよかった。どうにか野宿はせずにすみそうだね」

「当然よ。野宿なんかごめんだわ。乗れなかったらディブ持ちで高級ホテルでしょ」

アンリの一言が、またちよつと美空を刺激してしまったみたいだ。

「もう勘弁してくれよ。埋め合わせはするからさ」

「じゃあ、今夜のディナーはディブの奢りね。それで手を打つわよ」

「えー、そんなあ」

「なんか文句でも？」

と、そんな会話をしつつ、5人は次の列車を待つことになる。目的地のウエスト・リムは文字通りコペルニクスの西側の外周部に接しているリゾートエリアである。ここから距離は50 Kmほど、ローカル列車でもほんの10分ほどの距離だ。だが、列車を逃すと他に交通手段はない。なにせ、外は真空の月面なのである。コペルニクス宇宙港は24時間運用だが、都市には、それぞれに標準時が設定されていて、おおむね、各宇宙都市の8時間タイムゾーンと同期している。コペルニクスエリアは、宇宙都市タイムゾーンのゾーン1と同じ時間帯なので、そろそろ夜中に近い。ホームにも人影はまばらだ。

やがてプラットフォームに短い編成の列車が入ってくる。コペルニクススクレーター周辺エリアを結ぶローカル列車は、すらっとした流線型のコンパクトな列車だ。まあ、流線型というのが単にデザイン的な意味合いしかないことは言うまでも無い。ほとんどの区間は真空のトンネルを走るのだから。内部も飾り気はなく、座席なども実用本位のシンプルな形をしている。

ドアが開くと5人は列車に乗り込んで、ドアに近い一角を占領した。

「なんか、どこにでもありそうな列車よね。もうちょっとリゾートらしい雰囲気にはできないのかしらね」

車内を見回して美空がつぶやく。

「このあたりのローカル列車はみんなこんな感じだからね。ウエスト・リムだけ特別ってわけにはいかないんだろうな」

と、アンリ。

「そっか、アンリはコペルニクス、始めてじゃないんだよねえ。これまで何回来てるの？」

サラがアンリを見て言う。

「まだ一回だけだけどね。このまえ学会があつて、ノース・リムのゲノム研究センターまで来たのが初めてだよ」

「ノース・リムかあ、あそこのリサーチコンプレックスには一度行ってみたいんだよな」

とフランク。

「お前も研究畑に進む気になれば、いつでも行けるじゃないか」

「いや、だから、それが悩ましいんだって」

ディブは簡単にそう言うが、フランクにとって、目下最大の悩みがパイロットか研究者かという将来の進路なのである。

「ま、そんなに焦って進路を決めることはないと思うよ。人生、どこで転機が訪れるかわからないんだしさ」

サラはそう言うと言つてフランクの肩を、ぼんつと叩いた。

「ったく、そんな悠長なこと言つてると、あつという間に卒業よ。専門課程に行く前に、あの程度進路を決めておかないと、後で後悔することになるんだから」

美空が脇から突っ込みを入れるのだが、サラは平然としている。

「まあ、私はどのみちC&Iだしね。宇宙船乗りか航路局勤務くらいしか道はないから気楽だよ」

「その前に落第しないでね。処理能力は高くても、詰めがちよつと甘そうだから」

今日の美空はちよつと絡みっばい。まあ、サラはそのあたりは気にしない性格だから、衝突するようなことは滅多にないのだが。

「ちよつと発車が遅れてるね。ステーション3からの便の乗客待ちみたい。もう10分くらい前に到着はしてるみたいだから、もうすぐ発車するんじゃないかな」

美空の話を無視するようにサラが言う。ステーション3は8基ある地球静止軌道ステーションの一つで、これも巨大な宇宙都市である。こうした地球近傍のステーションは地球と月やL2のような地球公転軌道周辺の都市、そして惑星間、恒星間航路の中継ポートになっているのである。

「でもまあ、おかげで僕らは助かってるわけだけどね」

とアンリ。そのうち、遅れていた便の乗客らしい人たちが何人か、小走りにホームに降りてきて、列車に乗り込んでくる。ほぼ同時に、まもなく発車のサインが表示される。

「やっと発車か。早くホテルに着いて飯が食いたい」

ダイブが言う。

「まったく、みんなを騒ぎに巻き込んでいて、自分の胃袋の心配とはいいい度胸じゃない」
すかざず美空が突っ込む。

「でも、たしかに腹が減ったな。ホテルにチェックインしたら、まずは飯にしよう」

と、フランク。車内のアウトバンドで発車のサインが流れ、ドアが閉じる。

「あれ、まだ人がいるよ」

サラが言うので、外を見ると、男女の二人連れがホームに駆け込んできた。乗り遅れたか……と思った時にドアが開いて、どうにか二人は乗ることができた。大きな荷物をかかえた男の方は、いかげん倒れそうな顔をしている。到着ゲートからここまで、あんな荷物をかかえて走ってくれば、少々体力があっても、相当きついだろうに。地球からの観光客だろうか、その二人は座席に座ると、下を向いて苦しそうにあえいでいる。

「なんとか乗れてよかったねえ。ここに置いて行かれたら辛いよね」

サラがそう言うのと、ほぼ同時に列車が動き出した。ホームを離れて、エアシールドを通過したあと、列車は一気に加速する。とは言っても、窓の外でトンネルの灯りが一気に流れる以外に加速感はほとんどない。この列車にも慣性制御がかかっているから、この加速でもGはほとんどかからないのである。既に列車は時速にして数百Kmで突っ走っている。この速度なら、クレーターの端までは、それほど時間はかからない。あちらの二人連れの呼吸が落ち着く前に到着してしまうだろう。

「あれ、ホテルはなんて名前だったっけ？」

とフランクが尋ねる。

「えっと、たしか、ホテル・オルドリンだったと思うよ」

と、サラ。

「いかにもって名前よね。歴史の授業じゃないんだから。しかも、アームストロングじゃないって、オルドリン？」

美空が不満げにつぶやく。

人類の月探査の歴史をひもとけば、必ず出てくる名前が、ニール・アームストロング、つまり70年ほど前に月面への有人着陸を最初に成功させた、アポロ11号の船長である。月面に降り立った時、一人の人間にとっては小さな一歩だが……という名台詞を残した彼と共に

月に降りた飛行士がバズ・オールドリンだ。つまり、ナンバー2なのである。もちろん、歴史上輝かしい名前ではあるのだが。

「しょうがないよ、予算が限られてるんだしき。それでもロコミは悪くなかったんだよ」

サラが言う。ホテルは彼女がVUで探して手配したのだから、不満を言われるのはちよっと面白くないのだろう。ちなみにVU(ヴィュー)というのは、大昔風に言えばネットのことだ。今では、地球を中心にして太陽系内の惑星や宇宙都市すべてを、ワープ通信チャンネルを使って、ほぼリアルタイムに結んでいる。それを通して仮想現実をも共有できるので、ヴァーチャル・ユニバース、略してVUと呼ばれるのである。さすがに恒星間では、ハイレベルのワープ通信でも遅延が大きくなるので仮想現実はいまのところ伝送できていない。

「駅から車で10分ほどかかるんだっけ。コペルニクスを一望できる展望ラウンジとか、地球を見ながら泳げるプールとかもあるんだよね」

とアンリが付け加える。

「まったく、子供じゃあるまいし。展望台とかプールとかで浮かれてるわけ？」

「でも、無いよりはいいんじゃないか？」

まだ絡んでいる美空にダイブも隣でフォローするのだが、美空はちよっとふくれっ面をする。

「でもさあ、展望台はさておき、プールは大人の楽しみ方もあるんじゃない？」

とサラ。

「ふん、そりゃあんたはいいわよ……」

美空はちよっと自分の胸元に視線を落として、もじもじとする。まあ、サラと比べれば、誰が見ても明らかなのだが、さすがにこれは突っ込めないところである。

「そろそろ到着だな」

ちよっと気まずい雰囲気になりかけたところでフランクが言う。間もなく、速度がぐっと落

ちて、列車は明るいプラットホームに滑り込んだ。

「よし、降りるぞ。とりあえずホテルに入って飯でも食わないと腹が減って死にそうだ」

「そうね。今夜は、あんたの奢りだから豪勢にいかうか」

「おいおい、お手柔らかに頼むよ、貧乏なんだから」

そんな感じで5人はウエスト・リム駅のホームに降りる。列車は、ここからコペルニクスの外周に沿って一周するのだが、乗客はほとんどがこの駅で降りたようである。5人も、他の乗客たちと一緒に、上のフロアにある出口に向かって歩き出した。



駅前の車寄せは、もう行列ができはじめていた。この駅も地下駅なのだが、天井はかなり高く明るので閉塞感はまったくない。昔の宇宙都市では、その閉塞感から精神的にまいってしまふ人が多かったと言われているが、今はもうそんなことはない。住み慣れると地球暮らしよりも快適なほどだ。

「結構並んでるな。急ごう」

アンリがそう言うと、5人は小走りに車待ちの行列の最後尾に向かう。大昔なら駅のタクシー乗り場といったところだが、この時代の「車」は、全自動の交通システムだ。こうした宇宙都市には専用道路が張り巡らされていて、ほとんどの場所へこれで行くことができるのである。乗るのは簡単だ。乗り場に行つて、そのアウトバントに表示されているボタンに触れるだけである。利用頻度が高い乗り場には、車が待っているし、いなくても1分以内に配車されるから、こうして大勢が並んでいなければ、ほとんど待ち時間は無い。

「ホテル・オールドリンまでお願い」

サラがそう言うと、機械的な声で返事があつて、5人を乗せた車は静かに走り出す。駅前のロータリーから道路への合流もスムーズだ。しばらく走ると幹線道路に出る。本線には多くの車が走っているのだが、まるで計ったかのように、減速もせず合流できる。これは、走行中の車が自律的に間隔を調整するからだ。同時に、運行スケジュールはすべて集中管理されていて、渋滞や遅延はまったくくない。乗った瞬間に到着時刻がわかるから便利である。

しばらくトンネルを走ったあと、車は地上に出る。月面で地上を走る道路は、こことティコ外周のリゾートエリアくらいである。観光地だからなのだが、普通は地下に作る方が安上がりなのである。この道路を覆っている強化シールドは宇宙都市のそれと同じで、有害な放射線をカットしたり、明るさを調整したりする機能がある分、コストがかかる。

「そろそろ日没だね」

アンリが言う。日没と言っても空気の無い月なので、地球のような夕焼けなどはない。そもそも、昼も夜もそれぞれ二週間続くから、これからは、しばらく夜である。月を訪れる観光客

の多くは夜の時期を狙ってくるのだが、それは、もちろん、今、頭上に光っている、半分欠けた青い星、地球の眺望を楽しむためにほかならない。地球だけではない。星空もまたすばらしい。特に日没直後と日の出直前は、地球が欠けた状態だから、星がよく見える。それだけではない。地球の夜側には、一面に都市の灯りがまたたいている。夜が更けるにつれて、地球は満ちていき、一週間で、よくあるスナップ映像のような、丸い地球になるのである。

「この景色も好きなのよね」

と美空が言う。ちようど太陽が地平にかかりはじめる頃、周囲の山の影が月面に長く伸びて、幻想的な雰囲気をかもしだすのである。空気の無い月では、太陽が沈むと温度は一気に二百度も下がる。灼熱地獄から極寒の砂漠に変わるのだ。長い影は忍び寄り寒さの前触れでもある。

「私はこの空の方が好きかな。地球、天の川、それから天使の首飾り。ロマンチックじゃないか。」

サラが空を見上げながら言う。ほぼ真上にある地球の周囲には、明るく輝く光がいくつか見える。8基ある地球静止軌道ステーション、それから月軌道面に3基あるルナステーションのいくつかである。巨大な宇宙都市は極方向から見ると地球の首飾りのように見えるので、天使の首飾りと呼ばれている。これらのステーションのうち古い物は、建造されてからそろそろ300年になる。もちろん、定期的にリニューアル工事が行われているので、そんな古さなどみじんも感じないのだが。

建設のための資材は地球ではなく、すべて月から供給されている。月で採掘、精製された資源を使って月面の工場で組み立てられたモジュールを、大型のマストドライバーで軌道の上に上げた方が、地球から送るよりもずっとコストが低いのである。

そんな話をしている間に、車はまたトンネルに入る。もうすぐ目的地に到着だ。トンネルの分岐をいくつか通って、車はホテルのロータリーに滑り込む。ホテルそのものは半地下構造だが、エントランスと庭の部分は天井が透明な強化シールドになっていて、空が見える。もう太陽が沈みかけているので、明るさは人工の照明で保たれている。少し薄暗いのは、夜の時間帯だからだろう。

5人はホテルのエントランスで車を降りた。エントランス脇の庭にはプールがあるのだが、さすがにこの時間に泳いでいる客はいないようだ。

「ほら、プールがあるよ。誰もいないから、今なら美空もゆつくり泳げるんじゃない？」

サラが笑いながら言う。

「ほっとしてくれる？」

美空の反応は言わずもがなである。こうした女子同士の会話には、男子たちの入り込む余地がない。そもそも、下手に突っ込んだら命取りだ。とりあえず、5人はホテルのフロントに向かった。



5人はそれぞれフロントでチェックインして、男女別の部屋に分かれる。それぞれ男子3人、女子2人の相部屋だ。まあ、これはホテル代の節約でもある。半地下のホテルのこの部屋には窓がない。エントランスや庭に面した側の部屋には窓やベランダがあるのだが、お高いスイートルームなので、彼らには手が出ないわけだ。そのかわり、この部屋には面白い仕掛けがある。

「殺風景な部屋よね」

部屋に入るなり美空がつぶやく。

「しかたないよ。これでも予算ぎりぎりなんだから。それに、こういうことも出来るんだよ、こっちは」

サラはそう言うと、部屋のアウトバンドパネルを操作する。次の瞬間、壁や天井全体がガラスのように外の景色を映し出した。

「ね、こうすれば窓はいらないでしょ」

「すごい、これどうなってるの?」

「基本的にはサラウンドモードと同じ仕掛けなんだけど、それを意識じゃなくて、実際に壁や天井のパネルに投影してるのよ。光線の方もプログラムで正確に再現してるから遠近感もあるでしょ?」

「これって外の景色なの?」

「これはそうね。でも、月とか周辺軌道の様々な映像をリアルタイムで映せるわ。これがこのホテルの売りのひとつなの」

「これって、全部の部屋にあるの?」

「あはは、男子には内緒だよ。全周の画像を写せるのは一部の部屋だけなのよね。隣の部屋は壁の一部だけよ。まあ、DI使えば同じ画像をサラウンドモードで写せるからあまり変わらないんだけどね。こっちのほうがちよっと高級感があっていいでしょ」

つまり、これは女子の特権なのだ。

「さて、ダイナーの前にちよっと着替えでもしようか。シャワー使ったら先にいいよ」

「じゃ、ちょっとシャワー浴びてくるね」

美空がバスルームのドアを開ける。

「ねえ、さすがにここまでやることはないんじゃない？」

「いいじゃない、開放的な雰囲気だよ」

「外から見られてるみたいで落ち着かないわ」

服を脱ぎながら美空が言う。

「気にしすぎだって。どうしても気になるなら天井だけにしようか？」

「そうしてよ」

半月状の地球が輝く空を残してバスルームの壁が戻ってくる。美空はちよつとそれを眺めていたが、やがて下着を脱ぎ捨てるとシャワーを浴び始めた。小柄で華奢な白い身体が湯気にかすむ。

その頃、隣の部屋では……

「サラウンドよりこつちの方が、なんとなく雰囲気あるね」

窓からの景色のように見える外部映像を見ながら、アンリが言う。

「まあ、部屋にいる感覚で閉塞感がないからね。どうせなら壁全体に映してくれればいいのにな」

と、フランク。

「あれ、ディブ、お前何やってんだ？」

「ふふ、そのうちわかるよ。お約束だろ？」

「お約束……って？」

ディブは宙を見ながら何かをしている様子だ。たぶん、何かの仮想パネルを見ながら操作しているのだろう。

「よし、つながった」

その直後、窓の画像が切り替わる。いまひとつはつきりしないが、なんとなく人の姿っぽい。

「これって・・・」

アンリがつぶやく。

「お隣さんの環境センサーの赤外線画像さ。それもバスルームのな」

「おい、いいのかデイク。バレたら大変だぞ」

「大丈夫さ。まさか、環境センサーで覗けるなんて思ってもみないだろうさ。でもなあ、これはモーションセンサーを兼ねてるから一種のカメラみたいなものなんだ。ちよつと画像処理してやれば、結構きれいに見えるんだぞ。待ってるよ」

デイクはそう言うと、またなにやら操作を始める。同時に画像が少しずつはつきりしてくる。

「よし、これで色変換して・・・どうだ」

映像はかなり生々しい感じになってきている。湯気の影響でまだかすんではいるが、後ろを向いている身体の線がはっきりわかる。

「これ、美空か？」

「背丈からしてそうみたいだね」

アンリとフランクもなんとなく我を忘れている。

「よし、もうちよつと鮮明に・・・」

デイクがそういった瞬間、画像が途切れて一瞬ブロックノイズが入る。

「あんたたち、なにやってんのかなあ？」

そこにはサラの顔が大きく映し出されていた。

「環境センサーとは、なかなか味なマネするじゃない？ これはムラカミ君の仕業かな？」
「え、バレてる？ なぜだ？」

デイクはかなり慌てている。

「あんたたちが考えることなんか、最初からお見通しだったの。この部屋のセンサーとかカメラにはあらかじめトラップを仕掛けておいたのよね。このぞき魔ども、観念なさい」

「しまった、サラがいるのを忘れてたぞ。全部読まれてたってか？」

「そうらしいな」

「これ、まずいよね」

バスルーム覗きの現場を押さえられてしまったからには、この後の騒ぎが恐ろしいわけで。

「さあて、どうしてくれようかなあ」

画面の中のサラがニヤリと笑う。

「サラ、どうしたのよ」

と後ろから美空の声。と同時にサラの後ろに下着姿の美空がいきなり現れた。まさか、ここに見えているとは美空も思っていないだろう。

「あ、こら美空、だめ！」

「え、何？、え、あゝっ！」

美空も気づいたらしく、いきなりうずくまる。

「サラ、何やってんのよ、隣とつながってるんだってら言ってよね」

「ごめんごめん。でもさ、こいつらその前にバスルーム覗いてたって言ったらどうする？」

「嘘、マジで？」

これはまずいことになった。男子たちはそう思った。美空が覗かれたことを知ったら、後の祟りが恐ろしい。

「覗いたって、いったいどうやって？」

「いやあ、それがさあ、環境センサーの画像を細工してたみたいなのよねえ」

「環境センサーなんかで覗けるの？」

「それは、ムラカミ君に聞いてみたら？」

サラが意地悪そうな感じで笑いながら言う。

「こら、デブ。どういうことよ！」

美空はしゃがみ込んだまま、壁に映ったデイブの顔をにらみつける。

「あ、いや、その、シルエットくらいは・・・」

「し、シルエット!？」

美空が赤面しながら叫ぶ。

「ちょっと見てみよっか」

サラが言うと、脇に、さっきの映像が映し出された。

「あ、あんたね」

と言ってから美空は絶句する。

「で、もうちょっと加工すると、こうなるわけさ」

サラが言ったとたんに、映像がかなり鮮明になる。体の線どころか、かなり細部まで見えて
いる。

「な、な・・・なにこれ！」

美空は、体全体がもう真っ赤だ。

「ま、安心してよ。これは連中は見ていないからさ。この画像処理をやらかす前に止めてお
いたから」

サラも美空の反応をちよつと面白がっているようだ。しかし、男子たちの手の内は既にすべ
て暴かれてしまった。隣の部屋の3人は、ちよつと顔色が悪い。

「で、この始末をどうつけようか、って話なんだけどね」

「どうつけるものにも……、あんたたち、覚悟しなさいよね」

美空は思わず立ち上がって、壁の3人を指さす。だが、自分の姿に気がついて、またうずく
まり、持っていたバスタオルを壁に投げつけた。

「ねえ、こいつら3人、ひんむいて廊下に放り出すつてのはどう？ 首に、僕たちはのぞき
魔です、って札つけてさ」

「そ、そんなぁ……」

サラの一言に、一番慌てたのはアンリである。

「甘いわよ、サラ。一生後悔するようなやつがいいわね。ちよつと考えるから、首洗つて待
つてなさい」

美空がそう言うと、画像が切れた。さて、男子部屋は戦々恐々である。

「おいダイブ、この始末どうつけるんだ？」

フランクがダイブに食つてかかる。

「お前らだって、何も言わずに見てただろう、一蓮托生だよな」

ダイブとしては、ここは開き直りしかない。アンリはちよつと青ざめている。

「どうしよう、美空を怒らせるとあとが怖いよ」

「責任取って、何か手を考えろよダイブ」

「責任でも、どう取りやいいんだよ。俺一人廊下で裸踊りでもしろつてのかわ？」

「それはいい考えかもな」

「それなら、お前らも同罪だ、一緒にやるよな」

「そんなあ、僕は嫌だよ」

男子たちは、ちよつと仲間割れ気味になっている。

「こうして見てるのも結構面白いでしょ」

隣の部屋では、サラと美空が男子部屋の顛末を全部見ている。サラは自分たちの映像は切つたが、相手方の映像を残したままにしていたのである。

「向こうは気づいてないの？」

「デИБあたりなら気づくかもしれないけど、今はそれどころじゃないでしょ」

「それにしても・・・」

美空が服を着ながらつぶやく。

「失礼したらありやしない、人を猛獣みたいに。怒らせると怖い、つてなによ！」

「まんまだと思うけど？」

「あんたまで？」

まあ、人間自分に対して客観的になるのは難しい。これまでも美空は何度か怒りにまかせて、男子たちに無理難題をふっかけた実績がある。サラもそれはよく知っているので、この状況を作ることで、すこし美空の頭を冷やす時間を作りたかったのかもしれない。一方、男子部屋では・・・

「とりあえず、謝りにいったほうがよくないか？」

フランクが言う。

「でもさあ、あの勢いだと飛んで火に入る夏の虫・・・になりそうだしなあ。それと、なんとなく美空の顔を見るのも気まずい気が・・・」

とデИБ。

「でも、こつちに非があるのは明らかなんだから、僕も、こつちから動くのがいいと思うよ」

アンリも言う。

「それじゃあ・・・」

とフランクが立ち上がる。

「おい、どこへ行く気だ？」

「まあ、俺について来いよ。ちょっと考えがあるんだ」

3人は一緒に部屋を出る。

「あれ、あいつら逃げる気かあ？」

「んー、流れから言うと、詫びを入れに来る気みたいだけど。殊勝なというか、弱気というか・・・」

「ふん、そんな手に乗るかってのよ。来たら、目にも見せてくれるんだから」

「まあまあ、ちよっと様子を見ようよ。どんな手で来るか楽しみじゃない？」

「そうね。まずは出方を見ようか」

さて、女子2人は手ぐすねを引いて待つのだが、男たちはなかなか現れない。美空もだんだんイライラしはじめてくる。

「あいつら、マジに逃げたんじゃねーの？」

「うーん、逃げるったって、どこへ逃げるのさ。ここは月だよ」

「でも、遅すぎるわ。あいつら、また何か企んでるんじゃないの？」

美空のイライラが限界に近づいた頃、ドアのチャイムが軽い音をたてた。

「お、来たかな」

「遅いっ！ もう多少の詫びじゃすまないからね。覚悟しなさいよ」

美空はそう言うと、足を踏みながら大股に戸口に向かう。ドアを開けると、そこには男子3人。フランク、デイブ、そしてアンリ。デイブは、なんと大きな花束を持っている。

「こら、お前ら、今まで何を……」

と言いかけた美空だったが、この花束にはちょっと驚いたようである。一瞬、口ごもってしまっただが、気を取り直して続ける。

「な、なによそれ。そんな物で騙されるとでも思ってるわけ？」

「い、いや、そうは思っていないけど、手ぶらじゃ悪いと思って……」

ダイブが、気まずそうな顔をして言う。

「手ぶらだろうがなかるうが、そもそもが悪いじゃないの。この破廉恥野郎どもめ」

「すまん、つまり、その、あれは出来心というか……」

「あのね、出来心ですむんだったらケーサツはいらないってのよ」

美空は、待たされてたまったイライラを爆発させている。

「まあまあ、美空。ちょっと落ち着こうか」

サラが後ろから美空の肩に手を置いて言うのだが、美空は今にも食らいつきそうな顔をして男子たちを睨み付けている。

「なあ、とりあえず食事にいかないか。お詫びにご馳走するよ」

フランクが頭をかきながら言う。

「ふん、花の次は食べ物で釣ろうってわけ？ なめんじゃないわよ」

そう言ったとたん、美空のおなが、ぐうっと鳴った。美空は赤面してちよっと固まってしまふ。

「いいじゃない。ご馳走してくれるってのなら、ありがたくいただきます。話はそれから、ってことで」

タイミングよくサラが割り込んで、一同はとりあえず、ホテルのレストランへ向かうことに

なる。

「で？ 正直どうだった？ 美空は」

歩きながら、男子たちに向かってサラが言う。

「な、何を言い出すのよ、サラ……」

美空は真っ赤になって慌てている。

「もうかんべんしてよ。悪かったから……」

とアンリ。

「いやあ、しかし予想通りというか、期待を裏切らないというか、男つてのはみんな考えることが同じなんだねえ。わかりやすいというか……」

「予想通りって、サラ、あんた最初から知ってて私を先にシャワーに行かせたわけ？」

「あ、バレた？ てへっ」

サラがちよっと舌を出しておどけて見せる。

「あ、あんたねえ。それじゃあんたもこいつらと同罪じゃないの」

「いやいや、だから、一応寸止めだし」

「寸止めって、それ何よ。もう十分見えてたじゃない」

「もう、美空ったらまだまだ子供なんだから。あれくらいはサービスしなきゃ、大人の女とは言えないよ」

「あ、あんたねー、人ごとだと思って。それなら、今度はあんたがやってみなさいよね」

「じゃ、勝負してみる？」

「……」

今度は女子同士が仲間割れっぽい。しかも、話がかなりきわどくなってきた。男子たちは無言。ここでうっかり口を挟んでおはちがまわってきたら、集中攻撃されてしまうだろうことは容易に想像がつくわけ。

「こちら、お前ら、何ニヤニヤしてんのよ。変な妄想してんじゃないでしょうね」

まあ、口を出さなくても、流れ弾は不意に飛んでくる。男子は3人とも、いやいやとんでもないという顔をするが、アンリだけちよつと赤面している。それを見た美空が言う。

「凶星みたいね。まったく、男つてのはこれだから……。サラもこんな連中煽ってどうするのよ」

「いやあ、でも楽しいじゃん。ほら、もしかしたらさ、実は誰か美空のこと気にしてたり……。って、ないかな」

「な、何を言い出すのよ」

美空はちよつと赤くなる。しかし、ここは、男子たちも反応に困るところだが……

「ないない」

ときっぱり言ったのはフランク。

「フランク、あんたね、そんなきっぱり言うことないじゃない。別に私はあんたたちなんか、なんとも思っていないけど……。なんとなく腹たつし」

そうこうしている間にレストラン前までやってきた5人。場所柄、このホテルのレストランは24時間営業なので、こんな夜更けでも食事はできる。

「いらつしやいませ。5名様ですね、奥のお席にどうぞ」

このレストランも実際は地下にあるのだが、天井や壁には外部映像が投影されているため、屋外のテラスにいるような雰囲気になる。レストラン全体が、コペルニクス外輪山の上に乗っている感じだ。もう日が落ちた空には無数の星と半地球、つまり半分欠けた地球が浮かんでいる。時折、上空をコペルニクス宇宙港に向かうシャトルがランプを点滅させながら通過していく。

「いい感じじゃない。ロマンチックよねえ」

サラはそう言うと真っ先にテーブルに座る。

「でも、相手がこいつらじゃねえ・・・」

と美空。まだ機嫌は直っていないようだ。

「でもさ、こんな場所で女二人も寂しいよね」

「まあ、見た目はそうね。寂しい女に見られるのも癪だし、しかたがないか」

男子たちは、そういう会話を黙って聞いているしかないわけだ。ここで下手に口を挟むとまた話がこじれてしまうので。

「ほら、いつまで突っ立ってんの。座りなさいよ」

美空が言うので、男子3人もようやくやく席に着く。サラは、もうアウトバンドでメニューを開いて見ている。

「さて、何にしようかなあ。奢りだしね。ちょっと頑張っちゃおうかな」

「そうね、何頼んでも文句言われる筋合い無いしね」

物騒な会話である。

「なあ、多少は手加減してくれよな。頼める筋合いじゃないのはわかってるけどさ」

とフランク。

「わかってんだったら黙ってなさいっての。奢りだって言ったのはあんたでしょ」

と美空。

「まあ、同じ学生の身だしね。払える限度くらいは分かってるから安心してよ」

とサラ。だが、この2人に安心しろと言われてもムリなことは男子たちもよく分かっている。これはもう覚悟を決めるしかなさそうだ。

「そうそう、デイブ、あなたは倍付けだからね。駅での一件もあるんだから忘れないでよね」

美空は容赦ない。

「わかってるよ。はぁ・・・どうとでもしてくれ」

デイブはもう観念しているようだ。旅から帰ったら自分の間は節約モードを余儀なくされそうである。それに・・・

「そういえば、デイブ。あれの準備はいいのか？」

「ああ、ぬかりないよ」

「あれって？」

どうやら、アンリはフランクとデイブの会話の意味がわからないようだ。

「あんたたち、また何か悪巧みしてるわけ？」

美空はこういう会話を聞き逃さない。いわゆる地獄耳というやつだ。

「あ、いや、なんでもないよ」

とフランク。

「なんか怪しいなあ、これ以上、美空のご機嫌を損ねない方がキミたちのためだと思うんだけどなあ」

とサラ。

「だから、何でもないって。そんなご機嫌を損ねるような話じゃないんだから、気にしないでいいよ」

デイブも言うのだが、美空はまだ疑っているような顔でデイブの目を見つめている。

「とりあえず、料理を注文しようぜ。話はそれからってことで」

「そうやって話をはぐらかすところが、めちやくちゃ怪しいんだけど……。ま、おなかも空いたことだし、まずは腹ごしらえね」

そうやって、各自、それぞれにアウトバンドのメニューから料理を選んで注文する。男子たちは、女子の様子をちらちら見ながら戦々恐々である。

「何こっち見てんのよ。心配しなくても、きっちり高いのを注文してあげるから」

美空が意地悪そうな顔をして言う。まあ、これは覚悟を決めるしかなさそうだ。どうせなら気持ちよく、豪勢にいこう。そう思うしかない男たちだったが、結果から言えば、女子たちもそこは心得ていたようで、注文は割と無難な線に落ち着いてくれた。

「あー食べた食べた、満足」

とサラ。美空はちよつと不満そう。

「ちよつと手加減すぎたかもね。なんとなく不完全燃焼だわ」

などと言いながら、こんどはデザートメニューの物色を始める。女子たちにとって、大昔からデザートは別腹なのだが、美空にとつては、どちらかと言うとデザートがメインなのである。以前も、附属高があるL2宇宙都市の中央街区にある、学生たちには有名なレストランのデザートを5人前ぺろりとたいらげて、周囲を驚かせている。しかも、メインに大きなステーキを食べたあとで・・・である。その小柄な体からはちよつと想像ができない食べっぷりだ。

「ここ、デザートも結構色々あるじゃない。じゃ、これと、これと・・・」

いつものことだが、美空はまた2、3人分は食べる気らしい。

「あんだ、それだけ食べてよく太らないよね。うらやましいよ私は」

とサラが言う。サラの注文はコーヒーだけらしい。

「食べたいのはやまやまだけど、このところ運動不足でまずいのよね。残念だけどさ」

「燃費が悪いのかな、多少食べても太らないのよね」

「将来の旦那は大変だよ、美空の食欲を満たさなきゃいけないんだから」

「心配しなくても自分の食い扶持くらいは稼ぐわよ」

「だってさ、男ども。安心して持って行け、ってか？」

「何言ってるのよ、人をモノみたいに。それに、こいつらじゃ、明らかに力不足だわ、いろんな意味でね」

なんともはや、女子たちの会話に男たちが入り込む余地はなさそうである。そうこうしている間に、デザートが運ばれてくる。サラとフランク、デイブはコーヒー、アンリはケーキと紅茶、そして美空は・・・ケーキ2個にアイスクリーム・・・である。

「そりゃそうとき・・・」

コーヒカッツプを口元に運びながら、サラが言う。

「さっきの話は何だったのかな？そろそろ教えてくれないんじゃない？」

「いや、まあ、すぐにわかるよ。そろそろ時間だよな、デイブ」

「ああ、もうそろそろ・・・」

デイブがそう言った直後だった。周囲がぱっと明るくなった。頭上で何かが光った。

「何？これ」

美空が見上げた空には、大輪の花火。いや、花火をまねたホログラムと言った方が正しいかもしれないが、それでは風情がない。大昔の花火は現在でもその形を残している。だが、それは火薬を使った芸術ではなく、その燃焼過程とスペクトルを数学的にシミュレーションしたホログラムに置き換わっているのである。なので、これは空気のない月でも打ち上げ可能だし、学生の小遣いでもまかなえるくらい安上がりなのである。もちろん音も聞こえる。こちらは、アウトバンドで送られてくる疑似感覚だが。

「おお、綺麗だねえ。これ、もしかして君たちの仕業なのかな」

サラが言う。もちろん、仕掛けたのは男子たち、というよりフランクの提案でデイブがホテルに頼んでおいたというわけである。

「まったく、臭い演出よね。でもまあ、綺麗なことは認めてあげるわ」

と、美空もまんざらではない様子である。大昔から花火というのは人の心を強く揺さぶるものである。それは現在でも変わらない。色とりどりの光と、仮想現実とはいえ、腹の底に響くズンという音は、すべての感情を高ぶらせる。5人は、しばらく無言で花火に見入っていた。

「そういえば・・・」

美空がちよつと遠い目をして言う。

「私の実家の近くじゃ、今でも夏には本物の花火を上げてるのよね。もう千年も続いている伝統みたいなんだけど、音と光だけじゃなくて、煙とか、火薬の臭いとか、いろんなものがまざって、気持ちが高まるのよ。こうして見ていると、そんな風景を思い出すわ」

「僕も子供の頃はセーヌ川のほとりで花火を見たものさ。パリの花火は、もうずいぶん昔に、ここと同じホログラムが変わっちゃってたけどね。東京はまだ本物をやってるんだね」

とアンリ。

「不思議よね。人って、こういう一瞬の美しさに惹かれるでしょ。私が住んでたワシントンの桜もそう。一気に咲いて、一気に散って。春のあの時期はなんだか切なかったな」

サラもなんとなく思い出にひたっているようだ。

「ワシントンの桜ってさ、元々は昔の日本国から送られたものらしいよ」

とフランク。

「え、そうなの？ 美空の住んでた所にも桜はある？」

「もちろんあるよ。花火が上がる隅田川の土手は、毎年春になると桜の花がすごく綺麗なんだよ。ソメイヨシノだったかな。桜にもいろいろと種類があって、一番見事なのがその種類だあって、うちの、おばあちゃんが言ってたわ」

「そういえば、家に、ずいぶん昔の桜の絵が飾ってあったよ。うちの先祖は日本から渡ってきたらしい。たしかムラカミってファミリーネームは古い日本の名前だそうだけど」

「そうね、ムラカミって名前は私のまわりにも何人かいたわよ。日本地域に多い名前なのは

確かね」

花火の音に時々会話を邪魔されながらも、5人は話で盛り上がっている。フランクの作戦は見事に成功したようで、女子たちも、もうさっきの出来事などすっかり忘れてしまっているようだ。

ひとときわ派手な連発のあと、しばらく沈黙が訪れる。

「もうおしまいなのかな？」

とサラ。

「そうだな。二十分間って話だったから、そろそろおしまいだと思うよ」

デイブが言う。

「最後に・・・だよな」

フランクがデイブを見て言う。デイブは少し照れながら、美空を見て

「最後に、これが俺の気持ちだ」

そうデイブが言った瞬間に、空に、花火のような光で文字が描き出された。

「美空へ、・・・え？、あ、愛を込めて？」

「うわー、ムラカミ君ったら、やってくれるじゃない。いきなり告白タイム？」

とサラが言う脇で、なぜかデイブは慌てふためいている。

「え、え、なんで？」

「・・・・・・・・」

美空のほうは真っ赤になって固まっている。フランクもアンリもかなり意表を突かれた様子だ。

「なあ、デイブ。たしか、お詫びをこめて・・・じゃなかったか？」

フランクが小声でささやく。

「ああ、そのはずだったんだけど、いったいどうして・・・」

これは何かの間違いなのか？ それともデイブの本心なのか。

「で、デブ！ これ、何の冗談よ。あ、あんた、しかも皆がいる前で・・・」

美空が叫ぶ。

「あ、いや、これは・・・」

デイブが口ごもる。様子からして、何か間違いがあったのだろう。しかし、デイブはいまいち齒切れが悪い。

「あんた、まさか本気なの？」

そんなデイブの様子に美空がたたまかける。デイブは少し迷った表情を浮かべたが、意を決したように美空に向かってこう言った。

「ああ、本気だ。美空が好きなんだ」

これには全員が驚いた。

「えーーーーー」

まさかの告白である。察するに、美空に少なからず好意を抱いていたデイブは、この手違いを否定することもできず、引っ込みがつかなくなってしまう・・・ようである。しかし、これは仲間たちにとっては、まさに仰天の出来事だ。

「おい、デイブ、お前・・・」

「いいんだ、いずれ言おうと思ってた事だから。今すぐ返事をくれとは言わない。気持ち

決まったら教えてくれ」

「……」

そういうデιβを美空は直視できずにいる。うつむき加減で、視線をそらしながら小さな声で言った。

「少し……時間をちょうだい」

「ああ、わかった」

即座に拒否されなかったのは、脈があるのか、それとも全員の前で恥をかかせたくないという思いやりなのか……。

「さて、そろそろ部屋に帰って休もう。もうずいぶん遅い時間だし」

「そうね。後は明日のお楽しみーってことで」

フランクの一言で、その場はお開きとなり、それぞれの部屋に戻ったのだが、美空はなんだか考え込んでいる様子で、さっさとベッドに潜り込んで寝てしまい、男子部屋でも、デιβがなんとなく気まずそうにしていたので、とりあえず明日……ということになったようである。



さて、波乱の初日が終わって翌日。夜更かしが祟り、全員寝坊して朝食は抜き。結局、サラとフランクの二人が残りたたき起こして昼前にレストランに集合となった。当然ながら、二人以外は、まだ意識もうろうとした雰囲気だ。口数も少ない。軽いブランチを食べて、コーヒーを飲んで、ようやく復活・・・といったあたりで、サラが口を開く。

「さって、今日はどうしようか・・・っても、もうこんな時間だしねえ。一日のんびりするしかないかな」

「そうだな、みんな寝不足みたいだから、遠出も辛いだろ。明日の計画でも考えながら、ホテルでのんびりするってのがいいかもな」

フランクが言う。

「そうだ、プールいこ！、プール」

とサラ。

「えー、眠くて溺れそうよ」

美空は、本当に眠そうな顔をしている。まあ、昨夜のようなことがあれば、さすがの美空でも、あれこれ考え込んだのだろう。

「プールサイドで昼寝つてのも、なんとなくセレブっぽくてよくない？」

とサラ。

「そうだよ。部屋にいても寝ちゃうだけだし、そうしたらまた夜眠れなくなつて悪循環だからな」

「フランクもサラも、よく寝たくって、感じよね。私なんか、夕べはほとんど眠れなかったわよ。このデブが変なことするから」

「い、ごめん。でも、俺だって眠れなかったし・・・」

なんとなく気まずそうにデイクが言う。

「そりゃそうよね、あんたが熟睡してたら、首絞めてるところだわ」

「まあまあ、とりあえず一旦部屋に戻って支度してからプールサイドに集合な」

フランクはそう言う男子二人を促して部屋の方に歩き出し、サラも美空の肩を両手で押して部屋に戻って行った。

それから30分ほど後、5人はホテルのプールサイドに集合する。男子3人はトランクス。体格はデイクが圧倒的だ。体育会系の筋肉質。フランクは長身で割と均整が取れた感じだが、ちよつと筋肉は不足気味。アンリに至っては、まあ、天は二物を与えず・・・というのが正しいだろう。女子はというと、サラは間違いなく、周囲の男たちの目を釘付けにしている。黒のビキニからはみ出しそうな胸が悩ましい。一方の美空はいえば、サラと比べるのがそもそも間違いな、どちらかといえば未成熟。多少上げ底気味な水着でも子供っぽく見えてしまうのが、ちよつと残念。

「よし、全員集合したな。と言っても、あとは適当に・・・だけどね」

フランクはそう言うのと、準備運動を始める。

「あれ、泳がないのか？」

いきなりデッキチェアに腰掛ける女子二人を見てフランクが言う。

「わかってないねえ。大人の女はこうするのよ」

サラが、人差し指を立ててウインクしながら言う。美空はちよつと不機嫌そうに帽子を顔にかぶって寝そべってしまった。

「はいはい。まあ、ここなら日焼けもしないからいいか」

月の、しかも夜側だ。いくら明るいと言っても地球の光だけでは足りないので、可視光と赤外線照明が加えられているのだが、当然ながら日焼けすることはない。昼側の時は、逆に強烈な太陽光をシールドが適当に弱めて紫外線もカットしてくれるので、これまた日焼けの心配

はないのである。

男子たちは、思い思いにプールで泳ぎ始める。まあ、アンリの場合、泳いでいるというよりは浸かっているというのに等しいのだが。サラと美空はといえば、トロピカルドリンクを注文して、優雅なお昼寝モードといったところだ。

「でさあ、どうなの？」

サラが地球を見上げたまま、誰にともなく問いかける。

「どうって？」

「だからさ、美空はどうなの、ダイブのこと」

「……」

美空も地球を見上げながら、なにやら小声でつぶやく。

「ややこしいのよ、いろいろと……」

「ややこしいって？ まあ、あんまり詮索するつもりはないけど、いずれにせよ、あんまり答えを引き延ばすと気まずいんじゃない？」

「わかってるわ。わかってるけど、ちょっと時間が欲しいの」

そんな会話を男子たちは知って知らずにか、無邪気にプールではしゃいでいるように見える。だが、実は、こちらでも、その話が進行中。

「しかし、やってくれたよな。お前、本当に美空を？」

「ああ、そのうち言おうと思ってたんだけど、丁度いいタイミングだったしな」

「それじゃ、あれはお前が仕掛けたのか？」

「いや、あれは何かの間違いだ。でも、否定するものもなあ……」

「なるほど、引っ込みがなくなっただと？」

「ああ、でもいいんだ。本心には違いないんだから」

「万一……ダメだったら気まずくならないか？」

「ああ、でもその時は笑って諦めるさ。あとくされは残さないよ」

泳ぎの合間に、フランクとダイブはそんな会話を交わしている。アンリは一人、じたばたと泳いで、いや、浮いているようである。そんな感じで、その日の午後は、なんとなく時間が過

ぎていった。やがて、照明が少し赤みがかった色に変わり始め、夕暮れのイメージをかもした。す。

「さて、今日はこれくらいにしようか」

フランクと男子二人がサラと美空のところにやってきて言う。

「結局、一回も泳がなかったな、二人とも」

「いいじゃない、そういう過ごし方もありじゃないの？」

「ま、いいけどな。ところで、明日の話だけど、例のツアーに行ってみるか？」

「地底探検？ いいんじゃない」

地底探検というのは少し大きかもしれないが、月には大昔、溶岩が流れて出来たと考えられる地底洞窟がいくつも見つかっている。とりわけ有名なのが、ケプラークレーター西に広がるマリウス丘の地底洞窟である。マリウス丘は嵐の大洋の北側に位置する古代の火山地帯だ。もちろん、今はもう活動していないから、冒険好きな旅行者たちの格好の遊び場になっていて、コペルニクスエリアからの観光ツアーも多いのである。大きな洞窟のいくつかは、エアシールドで密封され、空気が満たされているので、宇宙服なしでも歩くことができるから、ちよつとした探検気分が味わえるのである。これも5人が月にやってきた目的のひとつだ。

「よし、それじゃ後でフロントに寄って予約を入れておこう」

「マリウス丘洞窟って、ここからどれくらいかかるんだっけ？」

「シャトルなら1時間もかからないと思うよ」

「じゃ、ゆっくり探検できそうね。楽しみだわ」

「サラったら、子供みたいよね。迷子にならないでね」

「そう言いながら、あちこち行っちゃいそうなのは美空だったりするけどね」

「俺に言わせれば、どっちもどっちだけどな。さておき、そろそろ部屋に戻ろう。晩飯は6時だからレストラン集合な」

「了解！」

そんな感じでコペルニクスの二日目が終わる。5人は何事もなかったようにディナータイムを過ごし、部屋への帰りがけ。

「ツアーの予約が取れたよ。明日は7時半にウエスト・リム・シャトルポートに集合だそう

だから、余裕を見れば、ここを7時には出た方がいいな」

「じゃ、明日は6時に朝食だね。こりや5時起きかな。ちゃんと起きてよ！、美空」

「何言ってるのよ。いつも寝坊するのはサラじゃないの」

「いやあ、遊ぶとなると不思議と寝坊はしないから大丈夫だよ」

「まったく、都合のいい性格よね」

「まあ、どっちもどっちなんじゃないか？一応目覚ましはセットしておけよ。こっちも、アンリがちょっと心配だけだな」

「あ、大丈夫・・・だと思う。たぶん・・・」

そんな会話をしながら5人はそれぞれの部屋に戻る。それから、それぞれに翌日の準備をしたり、VUビジョンの放送を見たりして就寝時間までを過ごすのである。ちなみに、VUビジョンは、VUつまりネット経由で放送される動画番組で、直接アウトバンドで受信できるほか、壁面のスクリーンに映し出すことも可能だ。DIを使うと、サラウンド受信も可能で、視聴者参加番組を、スタジオで見ている雰囲気も味わえる。情報共有モードでは、番組への参加も可能だ。火星軌道くらいまでの距離なら、地球から放送される番組に、ほとんど遅延なしに参加ができる。

「じゃ、俺はちょっとシャワー浴びて来るよ」

フランクは、そう言うのとタオルを持ってバスルームに入っていく。

「デイブ、ちょっといいかな」

フランクがいなくなるのを待っていたかのように、アンリが口を開く。

「どうした？いきなり」

「いや、ちょっと聞いて欲しい話があるんだ」

「改まって何だ？」

「実は、美空のことなんだけど・・・」

「ん？」

「僕もね、美空を、その・・・好きなんだ」

「え？マジなのか？」

「ああ、それに美空には、少し前に気持ちを伝えてある」

「なんだったって！じゃ、俺より先に・・・告白したってことか？」

「そうだよ。でも、実は僕も返事はまだもらってないんだ」

「そうだったのか・・・でも、どうしてそれを俺に？」

「僕もデイブの気持ちを知ってしまったからね。これをデイブに伝えておかないとフェアじゃないと思ってさ。もちろん、僕も本気だし、デイブとは勝負になるからね」

「なるほど。最大のライバルが隣にいたってわけだな。こりゃ、俺も負けるわけにはいかないな」

「でも、決めるのは美空だから、どっちが勝っても恨みっこなしにしたいな」

「まあ、どっちも振られるってオチもありそうだけどな。その時は一緒に泣こうぜ」

「嫌なこと言わないでよ。確かに、その可能性は否定しないけどさ」

「まさか、フランクとか・・・？」

「それって最悪だよな」

「あはは、そうだな。でも、あいつもそうなら言いそうなものだ。それに、サラがそんな事を言ったときに、あいつは真っ先に否定したからな」

「そうだったよな。何の迷いもなく否定したよね」

「あいつ、もしかして美空じゃなくてサラを？」

「うーん、でもありえるかもしれない」

「後で聞き出してみるか？」

「やめときなよ。今はそれどころじゃないし」

「それもそうだな。でも、あれを聞いて美空はちよつと不満そうだったな。まさか・・・」

「それ、もつと最悪。ドロドロになるパターンだよな」

「そうだな。もう妄想はやめようぜ。なんか思考がどんどん悪い方へ行きそうだ」

「同感」

「ま、今は忘れて、とりあえず旅行を楽しもうぜ」

「そうだね、そのうち返事があるだろうから」

「そっちはお互い首を洗って待つとしようぜ」

普段から毎日一緒に遊んでいる、良くも悪くも腐れ縁な5人である。しかも、思春期真っ盛りの高校生となれば、こういうことも当然起きうる話だろう。それも青春、と言ってしまうのは簡単だが、当事者たちにとってはなかなか重たい話には違いない。

男子部屋でこういう会話が進行する中、女子部屋は灯りが消されていた。サラが既にかすかな寝息をたてる中で、美空はやはり眠れずにいた。アンリからの告白は旅行の数日前。別に嫌いではなかったし、正直なところ、付き合ってみるのもいいかなと思っていた美空だったが、そのことで、仲間たちとの関係がおかしくなるのではないかという不安が返事をためらわせていたのである。そこに、まさかのデイブの告白。考えてみれば、もしデイブが先に告白してい

たら、そちらに決めかけていたかもしれないと思うと、どことなく罪悪感めいたものにとりつかれてしまうのである。いっそ、どちらか断ってしまおうかとも思うが、結果的に二人と気まぐずくなってしまいう可能性だって十分あるから、これも躊躇してしまう。美空はそんな袋小路に入り込んでしまっていたのだ。

もう寝よう……。美空は頭から布団をかぶるのだが、目が冴えてしまって眠れない。昨夜も寝ていないのに、いざ寝ようとすると思えない。そんな悶々とした夜が続き、美空が眠りに落ちたのは、もう朝も近くなってきた。



「いつまで寝てるの。起きなさいってば……」

「お願い……もう少し寝かせて……」

そんなサラの声で、やつとの眠りから無理矢理引き戻された美空である。しかし、時間はもう5時半をまわっている。

「何時だと思ってるのよ。もう起きなきや間に合わないっての！」

サラは容赦なく美空の布団を引きはがした。

「鬼いゝ、悪魔ああ……」

「なんとも言いなさい。さっさと起きないとそのまま廊下に放り出すよ」

「どうして、こんな時だけ、いつもと逆なのよ」

「あはは、そりゃこういう時だからだよ。いつものお返しもできるからね」

確かに普段、布団から出てこないのはサラの方である。附属高の寮では同室の二人。だいたいい、サラを起こすのが美空の日課なのだった。毎朝、サラの布団を容赦なく剥いでいる美空だったが、今朝は立場が逆転してしまっている。

男子部屋では、予想通り、アンリが大慌てで支度中。美空と同じで、やはりなかなか寝付けなかったようだ。とりあえずは6時過ぎにレストランに集まったものの、美空とアンリは、髪はぼさぼさ、目もうつろで、食事どころだはなさそうな感じだった。それでも、食べておかないと後が大変だからと、フランク、サラの二人が無理矢理に食事をとらせて、それから大慌てで準備をしてロビーに集合となった。

「えっと、シャトルポートってどうやって行くの？」

「表から車を拾って行こう。10分くらいのはずだよ」

「……」

美空は大きなあくび。まだ目がうつろである。アンリはちよつと復活したようだ。

5人は、ホテルのエントランスに止まっている車に乗り込んで、シャトルポートに向かう。

車は少し走ると、また地上に出た。空には少し膨らんだ地球。月の夜はまだ当分の間続く。やがて前方に、四角形の建物と尽きだしたマストライバーのカタパルトが見えてくる。折しも、小さなシャトルが空に向かって打ち出されていく。

「あそこだね。でも、意外と小さいな」

アンリが言う。

「まあ、ローカルポートだからね。シャトルも8人乗りとかで自動運転だし」

とサラ。そうこうしている間に車はシャトルポートの建物のエントランスに滑り込んだ。直前に到着した車から二人連れが降りてくる場所である。

「あれ、あの人たち……」

フランクがつぶやく。

「あれって、来的时候にルナ・トレインで一緒だった人たちじゃない？」

ようやく目が覚めてきた零囲気的美空が言う。コペルニクス宇宙港の駅で、発車間際に駆け込んできたカップルのようだ。

「そうだな。見覚えがあるよ。まあ、このあたりに来る観光客には人気のツアーだし、一緒になっても不思議じゃないよな」

ダイブが言う。5人も車を降りて、出発ロビーにあるツアーデスクでチェックインをすませる。

「フランク・リーブス様、5名様ですね。では、グループ11のシャトルにご搭乗ください。出発はゲート6番から20分後です」

「ありがとうございます」

ちなみに、こうした交通機関のチケットはもはや物理的なものではない。チケットやお金、クレジット、その他証明書に類するすべてのものは電子的に統一された形のオブジェクトにな

っっていて、各自のD Iユニットが、そのホルダーになっているのだ。この場合、D Iを通じて受け取ったチケット情報は5人で共有され、ゲートを通過するときに自動的にチェックされる。また、それを他人の視覚情報として共有することもできるので、係員に提示を要求された場合は、「見せる」ことも可能だ。また、情報はそれぞれのシステム上にもバックアップされていて、万一D Iユニットが故障した場合にも失われることはない。

「ゲート6はこっちだね」

サラが言う。シャトルポートでは、乗客が保有しているチケット情報に応じた案内が個別にアウトバンドを通じて送られてくるので迷うことはない。5人は昇降シャフトに乗って出発階に上がる。昇降シャフトは大昔で言えばエレベーターにあたる。しかし、今は、単なる光のチューブだ。乗客が入ると同時に、足元に仮想的な床が現れ、アウトバンドで行き先階を指定するボタンが表示される。これ进行操作すれば、その階まで行けるのである。床は特殊な電磁場で構成されている。これは、物質原子の周囲にある電子と同じように、力に対して反作用を生むと同時に、光の通過を妨害する。なので、スカート姿の女性でも下を気にする必要は無い。昇降には電磁場の作用と重力、慣性制御が組み合わされているので、かなりの高速で動いても、乗っている人が加速度でよるけたりすることはない。ただ、人間は視覚によっても運動認知を行っているので、超高層建築などに使われる高速シャフトでは、側面にも電磁フィールドを作って、外の景色を消し、かわりに動きの少ない外部画像を投影したりしている。

出発ゲートフロアでは多くの観光客が搭乗を待っている。このシャトルポートからは、周辺地域に向けた小型シャトルが発着している。その多くが境界の観光スポットで、ルナトレインのカバー範囲外にある場所だ。

ゲート6の前には、さっきの2人連れが先に来ていた。どうやら、グループ11はこの2人と一緒にいる。

「こんにちは」

2人連れのほうの女がほほえみながら挨拶をする。

「こんにちは。今日は一緒にします。よろしくお願いします」

フランクがこたえる。

「ところで、お二人は一昨日の夜に同じ列車にお乗りじゃなかったですか？」

「あれ、それじゃ、あの時に同じ車両に乗っていた？」

今度は男のほうと言う。

「そうです。我々も一昨日ここに着いたので」

「それじゃ、ちよつとお恥ずかしいところを見せちゃいましたね。もう少しで乗り遅れるところでしたから」

「いや、そんなことはありませんよ。でも大変でしたね」

「ええ、この人が道を間違えて大変だったんですよ。自信ありげに行くからついて行ったら行き止まりで……」

「あ、もうその話はなしにしてくれよ」

「そうでしたか。でも、どこかでも聞いたような話だよな、それ」

と、フランクは笑いながらサラの方を見る。

「いやあ、その話はやめようよ」

とサラ。

「ところで、皆さんもシャトルが遅れたんですか？あの列車は臨時便だと聞いてましたが」

「あ、いや、それは……」

とデイブ。

「シャトルは定刻に着いたんですけどね、こちらも色々あって……」

「道に迷ったり、ちよつとより道させられたりね」

アンリが付け加える。

「そうよ、誰かが余計なことするから、酷い目に遭ったわ」

「だから、悪かったって。もうその話はやめようぜ」

美空の一言にデイクが居心地悪そうに言う。

「あはは、じゃ、そちらもアクシデントですか。まあ、旅先ではよくありますよね」

「ちよつと！、笑い事じゃないわよ。反省が足りないみたいねえ？」

「あ、いやそういうわけじゃないけど・・・」

このカップルもどうやら、女性上位らしい。でもまあ、それが一番平和だという話もあるのだが。

「お二人って、もしかして、ご夫婦なんですか？」

と、美空が聞く。それを聞いた二人は顔を見合わせて笑い出す。

「いやだ、そんなんじゃないですよ。私たちまだ学生ですから」

「そうそう。俺たち、付き合っただけでいるけど、まあ、見ての通りの感じで・・・」

「でも、仲がよさそうで、いいですよね」

「いいんだか、悪いんだか・・・ねえ」

「まったく・・・。結婚なんてしたら一生奴隷かもしれないしなあ」

「人聞き悪いわねえ。せいぜい下僕くらいでしょ」

「どっちも似たようなものだと思うけどな」

そう言いながら二人は屈託無く笑っている。この二人は本当に仲が良さそうだ。

「いいなあ・・・」

美空がぼつりと言う。もちろん、デイクとアンリがそれを聞き逃すはずはなく、一瞬、耳をそばだてて次の言葉を待つ様子だ。

「お二人は地球からですか？」

「そうです。東京からなんですよ」

「東京ですか？私も東京出身なんです」

美空が言う。

「そうなんですか。奇遇ですね。それじゃ、皆さんも地球から？」

「あ、いえ、俺たちも学生で、L2から来たんです」

ダイブが言う。

「L2って、もしかしてアカデミーの？」

「ええ、まだ附属高のひよっこですけどね」

「いいなあ、僕も中学の頃はアカデミーにあこがれてたんだよね。パイロットになりたくても、残念ながらVPIなんてものを持っていなくて、手に入れることも出来なかったからあきらめちゃった。今は、東京の大学で生体電子工学を勉強してるんだけど」

「この人がパイロットやってる船なんて私は乗りたくないわ。もう、実験と称して毎日、ロクでもない物ばかり作ってるんだから」

「そういう言い方はやめて欲しいな。結構役に立つ物も作ってると思うんだけど」

「失敗作も多いわよね。このまえなんか、寝ている間に、その日の体調に合わせた朝食を作ってくれる調理ドロイドコントローラとか言う奴を作ってくれたんだけど、次の日起きたら調理ドロイドがめちゃくちゃやって、危うく火事になりかけるわ、キッチンは散らかりまくるわで大変だったんだから」

「あ、あれは・・・VMIの情報からちよつと余計なデータを引っ張ってきちゃって、指示が混乱したわけで、だから、修正版を作って渡したのに」

「いやよ、もう二度と使わないわ。身の危険を感じるから」

「そんなぁ・・・」

「発明家さんなんですわね。僕は遺伝子工学が専門なんですけど、生体電子工学は興味があるんですよな」

話を聞いていたアンリが身を乗り出すようにして言う。

「遺伝子工学かぁ。じゃ君は、将来は宇宙船乗りじゃなくて研究者になるのかな」

「ええ、本課程に進んだら、研究部門に行くつもりです」

「そっか、アカデミーは研究分野でもトップクラスだからな。アカデミーの人たちの論文には驚かされることが多いからね」

「大学ではどんな研究を？」

「まあ、言うのも恥ずかしいんだけど、インターフェイスを経由して収集できる生体情報の分析技術つてところかな。副次的なものを含めるとVMIだけじゃなくて、様々なインターフェイスから、その人の状態を反映したデータが得られるんだ。中にはそれが何と結びついてい

るのかわからない情報もある。既に意味が分かっているデータと関連させることで、未知の情報の意味を探ろう・・・っていう遠大な研究・・・かな」

「まったくね。遠大すぎて、私には時間の無駄遣いに思えるんだけど・・・」

「なんだか面白そうですね。もしかしたら、人の意識とか無意識と関連した情報もあるかもしれないですね」

「そうそう。もしかしたら、言語を介さずに、その人の考えていることを電子的に取り出すことも出来るかもしれない」

「それ、すごく興味があります。僕も、人の抽象思考がどこから生まれてくるのかを遺伝子工学レベルで考えたいんですよ」

「私には夢みたいな話にしか思えないのよね。だいたい、外から心の中を覗かれるなんて、あんまり気持ちがいいことじゃないように思うけど」

そんな話で盛り上がりだした頃、搭乗開始のアナウンスが入る。乗客は、それぞれのグループごとにシャトルに搭乗を始めた。この小型シャトルは8人乗りで乗員はいない。すべてが自動で運行されている。通路をはさんで左右2席づつが4列並んでいるシンプルなキャビンで、物理的な窓はない。前方の壁には飛行中、外の景色が映し出される。もし広い景色が見たければD Iを使ってサラウンドビューも楽しめる。

7人は乗り込むと、思い思いの席に座る。全員が着席すると、すぐにドアが閉じてシャトルは出発準備に入る。短いアナウンスが入ると、シートホルド装置が作動して、身体が軽くシートに固定される。それから、シャトルは他のシャトルと列を作ってカタパルトへ移動、順次空に打ち出されていくことになる。

「サラ、いつものあれ、やってよ」

美空が言う。

「いいよ。じゃみんなサラウンドで情報共有かけてね」

サラはC&Iなので、様々な情報にアクセスできる。地理データベースなども含まれるから、サラウンドの画像にそれらの情報を重ねて映し出すことも朝飯前だ。それを全員で共有すれば、景色を見ながら、自分が知りたい情報を拡張現実として見ることができるのである。

「あ、よかったら、お二人もどうぞ。ガイドマップがわりに。サラウンドにして情報共有かけてください」

「なんだか面白そうだな。お願いしようか」

「サラウンドって、私ちよつと苦手なのよね。なんだか目が回りそう。でも、せっかくのご厚意だし、お願いするわ」

サラウンドモードに切り替えると、ちよつとシヤトルがカタパルトに進入するところである。

「あ、射出の時は……」

サラがそう言いかけた瞬間、景色が一気に動いた。次の瞬間、シヤトルはもう月の上空に飛び出していた。

「うわっ……」

「きゃっ……」

2人が叫び声を上げる。

「あっちゃあ、遅かったか。射出の時はやめといたほうが……って言おうとしたんだけど。大丈夫ですか？」

「なんとか……」

「ダメ……ちよつと……」

2人はだいぶ顔色がよくない。アカデミーの学生は訓練で慣れているので、射出や着陸時でもサラウンドを使うことが多いのだが、一般の人の中には気分が悪くなる人もいる。ちよつとした絶叫マシンのような激しい変化があるからだ。

「サラウンド酔いの時は、しばらく動きの少ない空に注意を向けておくといいですよ」

美空が言う。

「私、メデイカルだから、もしどうしても気分が悪かったら言ってください。基本的な対処ならできますから」

「ありがとう。だいぶ落ち着いてきたから……大丈夫……」

そんな間にもシヤトルはどんどん高度を上げていく。実はこのシヤトル自体はエンジンを持

っていない。重力が弱い月では、カタパルト、つまり電磁マスドライバーだけで十分な速度を得られる。軌道修正や着陸は、到着地のシャトルポートからの指向性磁場と機体が発生する誘導磁場を同期させることによってコントロールされるのである。万一、到着地のシステムに異常が発生した場合にシャトルが墜落しないよう、射出時には、一旦軌道速度まで加速される。これならトラブルの場合でも軌道に乗ってしまうので落ちることなく救援を待つことができるのである。誘導システムの異常ではなく、着陸カタパルトなどに異常が発生した場合も、そのまま軌道上で待機することができる。

やがて、加速が止んで、シートホールドが切れた。着席サインが消える。巡航に入ったわけだ。このシャトルの速度だと、すぐに目的地を飛び越してしまう。だから、目的地までの半分ほどを飛んだあたりで、向こう側からの指向性磁場に乗って減速しながら降下していくことになる。降下に入ればまた着席サインが点灯するわけだが、それまでおそらく10分ほどの時間しかない。

「大丈夫ですか？」

美空が彼女のところへ言って尋ねる。

「ええ、ちよつと目が回ったけど、なんとか持ちこたえたみたい。ありがとう。でも、星が綺麗だわ。どれが、どの星かわからないくらい」

彼女が見上げた空には、満天の星。地球が明るくても、空気のない月では信じられないくらい多くの星が見える。星があまりに多すぎて、星座を見つけるのも簡単ではない。次の瞬間、星空を重ねて、星座の絵が映し出された。これはサラの作業。おそらく、星座のデータベースから持ってきたデータを重ねたのだろう。

「どう？これなら分かりやすいでしょ。あ、もし邪魔だったら消すから言ってね」

「ううん、素敵だわ。ありがとう」

彼女はサラのプレゼントを気に入ったようだ。

「そろそろケプラーの上だね。ここには、航路局の管制センターがあるんだよね」

サラが言う。サラウンドの映像上に、管制施設の位置が表示されている。彼らが月にやって

きたときにも見たケプラークレーター。コペルニクスよりも小さなこのクレーターだが、険しい外輪山に囲まれているため、大規模な施設は作りにくい。あるのは、航路局の管制施設や通信施設である。

「そろそろ降下が始まるな」

ダイブが時計を見ながら言う。目的地のマリウス丘クレーター群はもう目と鼻の先だ。そろそろ目的地の指向性磁場に乗る時間帯である。もうしばらくすれば、着席サインが点灯するだろう。ここまでは順調な飛行だったのだが……。



軽いサイン音がして、着席サインが点灯する。そろそろ降下に入るのだろう。着席したところからシートホルドがオンになる。こうなるともう立ち上がることはできない。全員の着席が確認されると、着席サインがグリーンに変わる。これで着陸準備は完了である。軽いショックがあつて、機体が降下を始めた。到着地の指向性磁場に乗ったのだろう。だが、少し降下したところで、機体がいきなり振動を始めた。振動はだんだん強くなっていく。

「何？これ」

美空が周囲を見回して叫ぶ。

「磁場とのシンクロがおかしいみたいだな。こりやまずいかもしれない」

とフランク。

「まずいつて？」

「このままだと着陸できないってことだ。減速を続けたら地上に激突するかもしれない」

ダイブが付け加える。

「なんとかならないの？」

と美空。

「この機体は全部自動だから、下でなんとかしてくれないと、こっちはどうしようもないよ」

サラが美空を見て言う。その直後に、視界にブロックノイズが入って、サラウンドビューが途切れた。

「どこかシステムがおかしくなってるみたいだな」

「下も気づいてるんじゃないか？復旧できないんだったら、すぐに磁場を切ってくれば時間稼げるんだけどな」

「いや、磁場を切ったら前後を飛んでいるシャトルも道連れになってしまう。それは無理だな」

「でも、それじゃこのシャトルは墜落するぞ」

「こつちでなんとか出来ないかな」

「ダメだろう。この機体は、人が操縦することを前提としていないから」

ダイブとフランクのやりとりを聞いていたアンリが口を開く。

「ねえ、非常用のシステムとか、ないのかな。保守用の機能とか」

「保守用か、もしかしたら・・・」

ダイブが、船のシステムをあちこち調べ始める。

「ダイブ、どうする気だ？システムにアクセス出来たとして何が出来る？」

「うまくシンクロできないんだったら、いつそ機体の誘導磁場を反転させてしまえば再加速できるかもしれないと思うんだけど」

「そりゃ、賭けだぞ。間違ったらどこに飛ばされるかわからないからな」

「ダメだ・・・アクセス出来るシステムからは動力系のコントロールは無理だな。あとは物理的にやるしかないけど、シートホルドがかかった状態じゃ身動きが取れない」

「ちよつと待って・・・なんとかできるかもしれないから」

「なんとかか、って、どうするつもりだ？ サラ」

サラは黙って、なにやら宙を見つめている。

「いいわ、これで保守用コンソールにアクセスできるはず・・・あとは任せたわよ、ダイブ」

サラがそう言うと、ダイブの前にコンソールのパネルが現れた。

「驚いたな、どうやったんだ」

「話は後よ、とりあえず、この状況を何とかしてちょうだい」

ダイブはコンソールをあれこれ操作していたが、やがて振り向いて言った。

「よし、磁場を反転させるよ。ちょっとショックがあるかもしれないけど、頑張ってくれよな」

そう言うと、ダイブはコンソールに最後のコマンドを打ち込む。その瞬間、ガクツツと大きな衝撃があつて、機体が急激に高度を上げ始めた。

「よし、とりあえず墜落はまぬかれたみたいだ。これで周回軌道に乗れる。しばらく時間が稼げるな」

「でも、それほど長くは稼げないわよ。このシャトルの生命維持システムはそれほど長時間持たない。せいぜい月を1、2周するくらいよ」

美空が言う。

「そうだな。なんとか下と連絡が取ればいいんだが」

「誘導装置もだけど、通信システムもおかしいわね。コミュニケーションリンクが切れたのが不具合の原因かもしれないわ」

とサラ。

「とりあえず、調べてみよう。シートホルドを一旦解除するよ」

ダイブがそう言うと、シートホルドが切れて、全員が動けるようになった。

「あの、いったい何が起きたんですか？」

2人連れの女の方が不安そうに尋ねる。彼らも乗客がもう2人いるのをすっかり忘れていたわけだ……。

「どうやら、このシャトルのシステムに不具合が起きて着陸に失敗したみたいです。とりあえず、墜落しないようにシャトルを軌道に上げることは出来たんですが、今、この後どうするかを考えているところです」

とダイブが答える。

「何か手伝える事があれば・・・」

と男の方。

「大丈夫です。我々は、こういう場合の訓練も受けていますから、任せてください」

フランクはそう言うのだが、実は彼らもこんな状況を経験したことはない。一般客を不安がらせないための配慮なのだが、本当はまだ次の手が思いつかないでいる状態だ。

「お願いします。何かあったら言ってくださいいね」

「わかりました。その時はお願いします」

フランクがそう言っている間に、デイブがシャトル後部の壁にあるパネルを開けようとしている。もちろんロックされてはいるのだが、保守コンソールがあればロック解除も可能だ。

「これが使えて助かったよ。でも、いったいどうやってプロテクションを外したんだ？」

とデイブがサラに尋ねる。

「それは内緒。まあ、C&Iには、色々と技があるのよ。いいから、早いとこ修理しちゃってよね」

「そんな簡単に言うなよ。まだ原因も分からないんだから」

そう言うってから、デイブは、例の2人が不安そうに見ているのに気がつく。これは、うかつな会話ではない。せっかくフランクが大見得を切ってくれたのだから、これ以上、不安を与えるわけにはいかないのである。

デイブはパネルを外すと、その中に身体半分潜り込んだ。

「メインコンピュータは正常みたいだな。でも、やっぱり通信機が動いていないみたいだ。パワーが落ちてるぞ」

「原因はわかるか？」

「パワーユニットからのラインが死んでる。しかも予備系統もだ。こんなことってあるのか？」

「でも、パワーユニット自体が死んだら何も動かないはずだし、通信機へのエネルギー供給だけが切れるなんてことがあるのかな」

「すまん、そっちのほうの回路はあまり詳しくないんだ。過負荷がかかって、両方とも落ちた・・・くらいしか理由が考えられないんだが。フランク、前の方のパワーユニットを見てくれないか」

「わかった。ちょっと待ってくれ」

フランクはキャビン前方の床にあるパネルを開くと、床に這いつくばってのぞき込んだ。

「パワーユニットそのものはやっぱり生きてる。出力ラインが1本だけ死んでるみたいだけど、これが通信機に行ってる奴らしいな。予備ユニットも同じだ」

「安全装置が働いたのなら、一度リセットかけてみたらどうだ？」

「原因が分からないのに、まずくないか？ パワーユニット自体が壊れたらアウトだぞ」

「それもそうだが、他に何か手はあるのか？」

フランクとデイクがそんな会話をしている時だった。

「大丈夫だと思うよ。このパワーユニットの場合は、個々の回路が壊れても全体に影響しないようになってるから。どうしても気になるんだったら、一度、コネクタを外してからリセットしてみればいいんじゃないかな」

後ろから声をかけたのは、例の2人の男の方だ。

「お詳しいですね」

「大学で実験に使っているユニットがこれと同じ系列のものなんだ。かなり旧式な奴だけど、そのぶん頑丈だから、簡単には壊れないよ。パワー消費の変化が激しいと不安定化して回路が落ちることがあるから、もしかしたらそれが原因かもしれない。実験室ではパワーラインのコネクタの装着不良とかが原因で落ちたこともあるから、一度外してリセットしてから取り付け直すといいかもしれないよ」

「わかりました。やってみましょう。デイク、俺はこっちを外すから、そっちも外してくれ」
「わかった。外すぞ」

フランクとデイクはそれぞれ、一本ずつ、パワーラインのケーブルを外す。このケーブルは特殊な光ファイバーで、高密度のレーザー光を伝送するものだ。この細いケーブルでも毎秒最大1メガジュールのエネルギーを伝送できる。短距離シヤトルだが、万一の場合を考えて近距離用ワイプ通信チャンネルを使用できるようにするため、これだけのエネルギーが必要になる

のである。もちろん、そんなエネルギーが漏れたら大惨事になりかねないので、ケーブルの接続確認のためのセンサーが取り付けられている。正常な接続を確認できなければパワーを遮断する安全回路が入っているのである。

「よし、じゃ回路をリセットするぞ」

フランクがコネクタ横のリセットボタンに触れると赤色だったランプが黄色に変わった。

「どうやら、大丈夫みたいだ。何かの理由で安全回路が働いたのかもしれない。じゃ、ケーブルを取り付けてくれ」

「了解」

二人がケーブルを取り付けると、黄色いランプが点滅を始め、やがてグリーンに変わった。

「よし、こっちはOKだ。そっちはどうだ？」

「こっちもOKだ。通信機のパワーが戻った。サラ、ちよつと非常回線を試してみてください」

「おっけー、ちよつと待ってね……。ん、大丈夫。データリンクを確立できた。こっちの状況は知らせておくわ。むこうの準備が整ったら非常回線経由でシャトルのコントロールを地上に渡すわね」

「ふう、どうにか一段落だな。あとは地上側に任せよう。しかし、こりやどう見ても整備不良だな。一度総点検した方がいいかもしれないな」

そんなことをしている間に、シャトルはほぼ月を一周しかかっている。ちよつと、昼から夜の境目あたりだ。

「コペルニクスエリアは混雑が激しいので、予定通り、マリウス・シャトルポートに誘導してくれるそうよ。ケプラーの管制センターが軌道を調整してくれるって」

サラがそう言った直後に、着席サインが点灯した。

「ありがとうございました。助かりました」

フランクが男に向かって言う。

「いや、僕なんかがお役に立てたんだったら嬉しいですよ。こちらこそ、ありがとうございます。君たちこそ命の恩人だ」

男はそう言いながら、自分の席に着く。女の方は、ほっとした顔で男に寄り添った。二人はそつと手のひらを重ねるようにする。二人のしている揃いのブレスレットが淡い光を放っている。

「かなり冷や汗ものだったけどね」

「ちがいない・・・」

そういうサラの隣にフランクが座りながらそう言う。洞窟ツアーはかくして最初から波乱の幕開けとなった。



やがてシャトルは何事もなかったように、マリウス丘のシャトルポートに着陸した。出迎えた航路局の係官に手短かに状況を説明しただけで、彼らはすぐに解放され、洞窟ツアーに戻るようになった。おそらくシャトルの運航会社は、すべての機体の総点検と整備体制の見直しを命じられることになるだろう。

「どうなるかと思ったけど、なんとか今日の予定はこなせそうね」

地下洞窟の入り口に向かって歩きながら、サラが言う。ツアーと言っても、安全のため決められたグループで行動する以外は、これといった制約もない。洞窟内はエアシールドが張られて空気が満たされているため、特に宇宙服は必要ないのだが、万一の時のために、ツアーデスクで個人用のエアシールド発生器を貸してくれる。万一周囲の気圧が急激に下がった場合、自動的に作動して気圧の低下を防ぐと同時に、短時間だが酸素も供給してくれる。その間に、順路のあちこちに設置されている緊急退避所に避難することになる。まあ、そうした事態はめったに起きないから、それほど心配することもないのだが・・・。

「ほんと、出だしから災難よね。いったい誰の行いが悪いのかしら」

と美空が、男子たちを横目で見ながら言う。

「ま、そりやお互い様だと思っけどな。とりあえず、無事にここまで来られたんだし、そんなことはもう忘れようぜ」

とフランク。男子たちはうなずくが、美空はちよつと不満そうな顔をしている。そうこうしている間に洞窟入り口のシャフトの前までやってきた。

「ここから降りるのね。とりあえず、全員、非常用シールドのチェックだけしておいてね」

サラが言う。ツアーチケット確認ゲートの向こうには、昇降シャフトがあつて、そこから地下洞窟に降りるのである。地下200mほどにある洞窟の中央部までまっすぐに降下するわけだ。

「それじゃ、第11探検隊。出発！」

サラが、おどけた感じで言い、全員、ゲートを通つて、シャフトに入る。

「そう言えば、まだ自己紹介してなかつたですね。俺はフランク・リービス。このメンバーは附属高の仲間で、星野美空、サラ・ホイットニー、それからデイビッド・ムラカミ、そしてアンリ・ガブリエルです」

フランクが全員を紹介する。

「あ、失礼。僕は浅沼健太、こっちは、中井美由紀。僕らは東京で同じ大学に通つてる。僕は工学、彼女は歴史が専門だけどね、よろしく」

「浅沼さんと中井さんですね。よろしくお願いします」

「あ、健太と美由紀でいいよ」

「ところで・・・」

と健太・・・

「アンリ・ガブリエルって、君、もしかして、このまえ遺伝子工学会で研究発表してなかつたかい？」

「あ、ご存じでしたか？ ノース・リムでやったやつですよ」

「やっぱり？ すごく興味深い論文だったから覚えてる」

「じゃ、健太さんもノース・リムに？」

「いや、残念ながら、論文を読んだだけけどね。そうか、それならさっきの話も納得がいくな。実は、僕の研究も、君の論文からだいぶヒントをもらったんだ。人の本質的な部分に直接アクセスしようという試みがすべて失敗する理由についての考察は、とても参考になったよ」

「それで、間接的なアクセス方法を考えようとしているわけですね」

「そうなんだ。でも、まだまだ先は長いけどね」

二人がそんな会話をしている間に、彼らは縦穴を抜け、地下洞窟の巨大な空洞へと降りて行った。洞窟の天井の高さは数十メートルくらいあるだろうか。七色の光でライトアップされているが、かなり荒々しい溶岩洞窟である。

「うわー、すごいな。こんな天井が高いなんて」

とアンリが叫ぶ。

「これって、大昔。月ができた直後に、溶岩が流れて出来た洞窟なんですよ？」

「そうだよ。出来た直後は、月にも活発な火山活動があったんだ。でも、すぐに冷えて固まってしまったけどね。ここはマグマだまりの跡らしいよ」

周囲には、ほかのグループとおぼしき人たちもいる。ここは通称、大ホールと呼ばれている部分。洞窟ツアーの入り口になっている。ここから、あちこちに小さな洞窟が伸びていて、各グループごとに、好きな洞窟に入って探検するわけだ。洞窟の総延長は数百キロになるが、観光用に開放されているのは、ここから半径数キロの範囲のみである。洞窟によっては、かなり険しいものもあるので、その難易度によってランク分けされている。Dランクは子供や体力のない人でも、十分楽しめるレベル。Aランクは、ちょっとした山登り並の体力がいる。とはいえ、観光用の施設だから、危険なほどではない。

「で、どっちへ行くの？」

美空が尋ねる。

「そうねえ。ちよつと詳細データを出してみよっか？」

サラがそう言うと、空中に洞窟のマップが難易度別に色分けされて表示された。既に洞窟に

いる人の位置も表示されている。

「やっぱ、お手頃なCランクあたりが一番混み合ってるわね。どうする？」

「当然、Aランクじゃないの？」

と美空。

「おいおい、俺たちだけじゃないんだから、無茶言うなって」

とデイブ。

「あ、あんまり気にしなくていいよ。でも、確かにAランクはちょっと辛いかもしれないけど」

健太が言う。脇で美由紀とアンリが大きくうなずいている。

「じゃ、Bランクで比較的、簡単そうなコースを探そう。どれか良さそうなコースはないかな」

フランクが、マップ見ながら言う。

「これなんかどうかな。人もいないし、起伏もそれほどなさそうだから」

サラが、ひとつの洞窟を拡大して立体図を表示する。かなり入り組んだ洞窟に見えるが、コースの高低差は少なそうだ。とりあえず、全員異議はなさそうなので、そちらへ向かうことにする。

「結構狭いね」

アンリが洞窟の入り口を見て言う。

「うん、いい感じじゃないの。何か出そうでき・・・」

とサラが意地悪そうに笑う。

「えー、やめてくれよ。僕、そういうのは苦手だから」

「これも附属高七不思議だよな。先端科学の申し子、アンリ・ガブリエルが、お化けを怖がるなんてさ」

フランクがアンリの肩を叩きながら楽しそうに言う。まあ、この手の話は、どれだけ科学が発達してもなくなならない。人の心の闇とでも言うのだろうか。そういう意味では、人は大昔から本質的に変わっていないのである。

「あのー、私もそういうのは苦手なんだけど・・・」

小さな声でそう言ったのは美由紀である。健太が脇で苦笑いしているところを見ると、彼女もかなりダメな部類のようだ。

「いいじゃない。出たら出たでとっ捕まえれば面白いんじゃないの」

「そうだな。捕まえて見世物にでもするか」

美空とデイブはそんな感じで、真っ先に洞窟に入ろうとする。

「待ちなさいよ。一緒に行かないと危ないよ」

サラもそう言うと二人の後を追うように洞窟に入っていく。そんな感じで、7人の洞窟探検が始まったのだが・・・。



洞窟は少し進むと思っていたよりも狭い感じになってきた。足元もちよつと荒れた感じで、気をつけて歩かないとつまずきそうだ。

「結構荒れてるわね」

サラがあたりを見回して言う。この雰囲気なら、ほかのグループが入っていないのも、なんとなく納得出来る。普通の観光客なら、このあたりで引き返すだろう。

「大丈夫ですか？ 足元が悪いから気をつけてくださいね」

「なんとか……。ありがとう」

アンリが美由紀に声をかける。健太が付き添ってはいるが、なんとなく大変そうだ。このあたりの重力は少し弱めに調整されているようだが、本来の月の重力に比べるとまだかなり強い。転んだりすると怪我をするかもしれない。起伏こそ少ないが、洞窟は曲がりくねっていて、先も後も見通せない。

「なんか雰囲気出てきたじゃない。いい感じだわ」

美空は楽しそうだ。

「こら、あんまり先に行くなよ」

美空とデイブがどんどん先に進んでいくので、フランクが後ろから声をかける。洞窟は曲がりくねっているので少し先に行くと姿が見えなくなる。そんな状態で何か起きるとまずいわけだが、二人はそんなことはあまり気にしていなさそうだ。そのうち、とうとう見えなくなってしまう。

「まったく、困った奴らだな」

「まあ、いいんじゃない？ どうせ当分一本道だし」

「でも、大丈夫かな……二人だけで」

「まあ、二人だけでお話ししたいことでもあるんじゃないの？」

「それって……」

アンリはちよっと心配そうだ。もちろん心配のしどころは、他の仲間とは違うのだろうけれども。

さて、それから30分ほど歩いたあたりで、5人はちよっと広い場所に出た。脇に緊急避難用の待避所が作られていて、休憩用のベンチも用意されている。

「あれ、いないねえ、美空たち。このあたりで待ってるかと思ったんだけど」

「まったく、どこまで行ったんだ、あいつら」

「とりあえず、ちよっと休憩しない？」

「そうだな。一休みして、ちよっと連絡をとってみよう」

5人はベンチに腰掛け、フランクがコミュニケータを取り出す。コミュニケータは通常はDIと同じ無線回線でVUとインターフェイスされている。相手が、VUに接続可能な場所であれば、どこでも通信ができる。音声や映像は、直接出すこともできるし、必要に応じてアウトバンド信号を使って仮想感覚として共有することもできる。もし、自分や相手がVUに接続できない場所にいた場合、近距離ならば直接無線通信を行うこともできるが、到達距離はあまり長くない。この洞窟内は観光スポットなので、もちろん、どこにいてもVUにはつながるはずである。

「おかしいな、接続反応がないぞ。洞窟内ならどこでもつながるはずだよな」

「そのはずよ。ちよっと待ってね」

サラもコミュニケータを取り出して表示をのぞき込む。

「たしかに、応答が帰ってこないね。二人ともコミュニケータを切ってるなんてことないよね。インターフェイス回線の調子が悪いのかな」

「直接呼んでみるか？」

「そうね。洞窟の中だからあまり離れると届かないかもしれないけど、それほど遠くまで行ってなければ・・・」

そう言うと、サラはコミュニケータを直接通信モードに切り替える。

「うん、反応があるね。つながりそうよ」

「共有してくれ」

「了解。いいよ」

コミュニケーションは音声も出せるが、アウトバンドで情報共有することで、音声だけではなく相手側の様々な情報も共有できる。

「おい、美空、デイク、聞こえてるか？」

フランクが呼びかける。

「フ・・ク、ちよつと・・悪いわ。こっちは・・」

「美空、ちよつと途切れ途切れだ。ビットレートを落としてくれ」

もちろん、こうした伝送は、昔で言うデジタル通信だ。当然ながら、この時代では受け渡せる情報量の最大値は半端端ではない。ただ、通信回線や電波の状態がよくない場合には、伝送速度を落として、信号を冗長化し、エラー訂正を行う必要がある。音質が多少落ちたり、遅延が発生したりするが、かなり微弱な信号でも途切れずに通信ができる。

「これでどう？聞こえてる？」

「ああ、大丈夫だ。今、どこにいる？そもそも、どうして回線がつかないんだ？」

「わからない。ちよつと変な場所に入り込んだみたい。マップも見られないから、どっちへ行ったらいいかもわからなくて」

「もう、勝手に行っちゃうから迷子になるのよ。ちよつと待ってね、こっちのマップ情報を送るから、通ったルートを出してみて」

サラがそう言うと、全員の視野に洞窟のマップが表示される。

「通ったのはたしか・・このルートね」

美空がそう言うと、マップの上に軌跡が表示された。

「そう、で、この先からわからなくなったのよ。マップに載っていない脇道に入っちゃったみたい」

「でも、それって変よね。通行禁止の脇道ならマップに進入禁止マークが出てるはずだけど」

「でも、脇道があるって表示すらないのよね。気がいたら、いつの間にか迷子になってた

わ

「まったく、分かれ道があったら、まずマップを確認するのが基本じゃない。何やってんのよ」

「そんなこと言ってもさあ、まさかマップに載ってないなんて思わないじゃない。それに・・・」

「ちよつと待てよ。そりゃないだろ。どんだん先に行っちゃったのは美空じゃないか。俺はついて行くのが大変だったんだぞ」

「おいおい、仲間割れしてる場合か？とりあえず、そこを動くな。探しに行くから」

「コミュニケーションのビーコンをオンにしといて。たぶん、信号をトレースすれば見つげられると思うから」

「わかったわ。悪いけど、よろしく・・・」

美空はちよつとバツが悪そうな雰囲気である。まあ、このあと向こうではダイブが一方的に責められることになりそうだが。

「まったく、人騒がせな奴らだ。すみませんね、健太さん、美由紀さん。なんか騒ぎに巻き込んでしまった」

「いや、いいんだ。ちよつと心配だから急いで探そう。マップに載ってない場所に行くなら全員で動いた方が安心だろうね」

「そうですね。申し訳ないですが、一緒に来てください」

5人は、広場の先の、さらに洞窟の先へと進んでいった。しばらく進むと脇に細い餅が枝分かれしている場所に出た。

「こっちの道はマップにないな。たぶん、こっちへ行ったんじゃないか？」

「うん、ビーコンはこっちの方から来てるね。まだだいぶ弱いけど」

「僕たちまで迷ったりしないよね」

アンリはちよつと不安そうだ。

「うーん、ないとは言えないけど、とりあえず、ここからは通った道を記録していくから、たぶん大丈夫よ」

「まあ、サラがそう言うんだったら・・・」

「よし、じゃ進むぞ」

フランクを先頭に、5人は脇道へと入っていった。最後にサラがコミュニケーションデータを使って、ルートを記録しながら歩いて行く。コミュニケーションデータは多機能端末でもある。移動したルートや周囲の環境情報を記録するレコーダーにもなるため、宇宙などで未知の場所を探索する場合は必ず携帯するのである。大昔、携帯電話がコンピュータを内蔵したスマートフォンに変わってから、この種のデバイスはずっと進化を続けている。

「重力は正常みたいだな。ということは、ここも一応はルート内ってことか。でも、どうしてマップがないんだろう」

「わからないわ。でも、情報系の回線は切れてるから、もしかしたら何かのトラブルかもしれないわね。立ち入り禁止表示がまだ出ていないだけなのかも」

「だとしたら、もしここで何かあったら見つけてもらえないかもしれないね」

「そうならないことを祈るしかないな」

そんな話をしながら5人は先に進む。さらに20分ほど歩いた後、また少し広い場所があった、待避所があり、その先で道が枝分かれしている。

「これはどっちだ？」

「うーん、ビーコンが両方から来るわね。先の方で道がつながってるみたいよ」

「じゃ、少なくとも2人はその先にいるってことだな。なら、どっちへ行っても同じか」

「そういうことになるけど・・・ちょっと待ってね。距離差を見てみるから」

サラはちょっと宙を眺めて指を動かしている。コミュニケーションデータのアウトバンドパネルで何か操作をしているのだ。ビーコン信号には固有の繰り返しパターンがあつて、違うルートから来た信号の位相のずれでおおまかな距離差がわかるのである。

「うん、信号のずれから見ると、距離は右の方が少し短そうね」

「じゃ、右だな」

「そうね。この先、道が複雑になってるかもしれないから気をつけて」

「了解だ。じゃ行くぞ」

「あ、ちょっと待って」

サラはそう言うのと待避所の方に歩いて行き、しばらく何かを調べてから戻ってくる。

「やっぱり、ここも回線が切れてるわ。待避所のシステムは生きてるけど、外部との通信はできなさそうね」

「そうか、やっぱり何かトラブルがあったんだな。急いだ方が良さそうだ」

5人は右ルートを先へと進む。やがて、予想通りに脇から別の道が合流し、その先が広場になっていて、さらに枝分かれしている。

「近いね。この右側から、かなり強い信号が来てるわ」

「よし、じゃ進むぞ」

「お二人とも大丈夫ですか？」

アンリが健太と美由紀のほうを見て言う。

「ええ、なんとか」

「僕も大丈夫だ。最悪、美由紀を背負う体力くらいはあるさ」

「あのねー、そこまでひ弱じゃないわよ」

「おっと失礼！」

少し進むと、先の方に人影のようなものが見える。

「おーい、美空、デイク。おまえたちなのか？」

フランクが叫ぶと向こうからも返事があった。美空だ。

「遅ーい。待ちくたびれたわよ！」

「あのなあ、さすがに怒るぞ。誰のせいでいったいこんなところまで来たと思ってるんだ」

「あはは、ごめんごめん。冗談だって。感謝してるから」

「まったく・・・」

フランクはあきれがるが、美空は悪びれる様子もない。デイクはなんとなく疲れ果てたという感じだ。おそらく、ずっと美空に文句を言われ続けていたのだろう。少なくとも甘い会話になった様子はなさそうだ。

「とにかく無事でよかったよ」

と、アンリ。

「よし、急いで戻ろう。あまりここには長居しない方が良さそうだからな」

「そうね。何かトラブってるのはたしかだから、少なくとも情報回線が使えるところまで急いで戻った方がいいわ」

フランクとサラがそう言って、今来た道に戻ろうとした時だった。

「あれ？風？」

美空がつぶやいた。その後、洞窟の奥から、ゴーツという地響きのような音が聞こえてきた。



「何？」

サラも立ち止まってあたりを見回す。

「まずいぞ。気圧が下がり始めてる。壁によって何かにつかまれ！体を低くして頭をカバーしろ」

フランクが叫ぶ。もし、エアシールドがどこかで破れたのならば、一気に空気が吸い出されるから、何かにつかまらないと吹き飛ばされてしまうかもしれないのだ。風で飛ばされてくる物も危険だ。当たれば大怪我をするかもしれない。7人はあわてて洞窟の隅によって身をかがめた。

「何が起きたの？」

「わからない・・・来るぞ、ふんばれ！」

フランクの声をかき消すように、一気に空気が流れて、砂塵やら小石やらいろんなものが飛んでいく。体を持って行かれないようにするのが精一杯で、みんな声も出ない。気圧が一気に下がって、肺の中の空気が流れ出すのがわかる。こんな時に息を止めるのは逆効果だ。下手をすると肺が破裂してしまうから、口を開けて気圧の変化を受け入れるしかない。空気がだいぶ薄くなって風が弱まってきた頃、非常用のエアシールドが作動して、それぞれの周囲にフィールドを形成し、最低限の気圧を維持し始めた。これは個人用の気密シールドだが、あまり長時間は持たない。

「聞こえてる？ 音声共有はうまく行ってるかな？」

サラが叫ぶ。と言っても、これはコミュニケータのアウトバンド疑似聴覚を経由した声だ。エアシールドのフィールドが接していないと音は届かない。間には真空があるからだ。こういう場合は、こうして会話をする。どうやら、様子からすると全員、うまく音声共有は出来ているみたいである。

「少し戻ったところに待避所があるわ。システム自体は正常みたいだったから、急いで！」

7人は、急いで来た道に戻る。足元には風で飛ばされた小石や岩がごろごろがっていて、気をつけないと躓いてしまう。

「きゃっ！」

美由紀が叫び声を上げる。小さな岩に躓いてよろけたところを、健太が受け止めた。

「大丈夫か？」

「ちよつと足をやっちゃったみたい・・・」

「まずいな。よし、とりあえず・・・」

と健太が美由紀に背中を向けてしゃがむ。美由紀をおぶって歩くつもりらしい。

「ごめんね」

「いいって。それより急ごう」

健太は美由紀を背負うと皆の後を追って歩き出す。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。美由紀がダイエットしてくれてたから助かったよ」

「あのねえ、こんな時に・・・」

美由紀が健太の首を絞めにかかる。

「ごめんごめん、首締めるのは止めてくれないかな・・・」

「とりあえず、急ぎましょう。この先、左ルートはダメみたいだから右から行きます。ちよつと狭そうですけど、気をつけてください」

フランクが皆を先導する。サラ、美空、アンリそして健太と美由紀が続き、最後がデイクである。かなり狭くて荒れた道だったが、どうにかエアシールドが切れる前に7人は緊急退避所がある広場にたどりついた。待避所の入り口にはグリーンランプがともっている。空気が抜けると自動的にシステムが起動されるようになっていた。グリーンランプは待避所が利用可能であることを示している。

緊急退避所はドーム型の小さな建物だ。詰め込めば2、30人は入れるだろうか。入り口はエアロックになっていて、5人くらいが一度に入ることが出来る。

「よし、僕とデイブが残るから、みんなは先に入ってくれ」

フランクが言う。

「わかったわ。中の様子は連絡する」

美空はそう言うと、健太と美由紀をうながしてエアロックに入る。アンリ、サラも続く。エアロックのドアが閉まると、すぐに空気が満たされ、それを検知した非常用エアシールドが動作を停止する。気圧が安定すると、内側のドアが開いて、5人は内部に入った。何もない、がらんとした空間。壁全体が白っぽく光っていて、落ち着いた雰囲気だ。非常時に気持ちを静める効果を意識して作られているのだろう。

壁の一部に管理用のコンソールがはめ込まれている。サラはそれに向かうと、まずエアロックのドアを閉め、外の二人が入れるように空気を抜いた。

「フランク、聞いている？ 中は大丈夫よ。生命維持システムも正常に動いてるわ。でも、通信はやっぱ切れてるみたいね。エアロックを開けるから入ってきて」

「了解だ。これから入る」

しばらくして、ドアが開き、フランクとデイブが中に入ってきた。

「さて、とりあえず急場はしのいだけど、これからどうするかな」

「そうね。通信システムが回復しないと連絡が取れないわ」

サラが、コンソールをゲンコツで軽く叩いて言う。

「でも、かなり広範囲に空気が抜けたみたいだし、救助隊が探しに来るんじゃないのか？」

「そうね。でも、ここは一応閉鎖区画の扱いみたいだし、我々がここにいることは、システム上ではわからないだろうから、もしかしたら厳しいかもしれないわよ。当然、わかってる人たちが先に救助するだろうから」

「この空気はどれくらい持つの？」

美空が聞く。

「そうだな、このサイズの避難所だと、この人数で、持って一日つてところか。救助にそれほど時間がかかることは想定されていないだろう」

ダイブが言う。

「ちよつと待ってね。酸素の残量は・・・7人だと20時間くらいかな。一日は持たなさそうね」

サラが管理コンソールを見て言う。

「よし、とりあえず、なるべく酸素の消費を抑えて、しばらく様子を見よう。10時間を過ぎて助けが来ないようなら、何か手を考えないとな」

ある程度待っても助けが来なければ、なんらかの手段で助けを呼ぶなり、次の手を考えるための時間的な余裕がほしい。フランクはその決断のポイントを10時間後としたわけだ。

「そうね。私はなにか通信手段がないか探してみるわ」

「たのむよ、サラ」

サラが壁際のパネルを操作している間、残りのメンバーは部屋の中で思い思いに休んでいた。出来るだけ酸素の消費を減らすため、座ったり寝転んだりして、なるべく体を動かさないようにする。それがこういう場合の鉄則なのである。

「非常用の発信器もダメね。パワーが入らないわ。どうやらこの区画全体がメンテナンス中みたいね。ここに入れたこと自体がラッキーだったみたいよ」

サラはそう言うと、壁際に座り込んだ。

「まあ、しばらくは空気も持つから少し休みながら、どうするか考えよう」

フランクが言う。

「非常用のビーコンは使えないの？」

と美空。

「ダメだな。この中にいると、コミュニケーターのビーコンは遮られて遠くまで届かないんだ」

ダイブが首を振りながら答える。

「最悪の場合、誰かが助けを呼びに行くか・だが、途中の道がどうなっているかわからな
いからリスクだ。次の待避所まで、非常用エアシールドを使っても空気はぎりぎり。途中で
道がふさがっていたら、最悪、戻ることもできなくなるかもしれない」

「まだ時間はある。少し休んで、それから考えても遅くない」

「そうだな。体力と酸素温存のために、少し昼寝でもするか」

「あなたたち、気楽なこと言ってるわね。まあ、それ以外にすることもないのは確かだけど」

ダイブとフランクの会話に美空が絡むが、こころなしか元気がない。

「それ、おそろいなんですネ」

アンリが、健太と美由紀のブレスレットを見て言う。

「ああ、これ？」

健太が自分のブレスレットを指して言う。

「ちょっと恥ずかしいわよね。柄にもなく、この人が誕生日にくれたんだけど、実はお手製の試作品だったのよ。またしても、実験に巻き込まれたのよね」

と美由紀が不満そうに横から口をはさむ。

「それ、もしかしてD Iユニットなんですか？」

と、デイク。

「うん、D Iユニットなんだけど、ちょっと付加機能をいくつか入れてあるんだ。美由紀が言うとおり、実験段階の機能なんだけどね」

「それ、さっきからいい感じに光ってますよね。アクセサリとしても使えそうじゃないですか」

アンリが言う。

「それがねえ、聞いてよ。私も最初はそう思ったんだけど、実はこの光が実験のひとつらしいのよ。これが情報を伝達する手段になるらしいんだけど、私には単に光ってるようにしか見えないのよね」

「光で情報って、アウトバンドと接続するんですか？」

「アウトバンド接続の機能もあるよ。インターフェイスがおかしくなった時のメンテナンス用なんだけど。でも、それはスペクトル全体の一部、赤外領域だけしか使っていないんだ。可視光部分は、V M Iから拾った脳波情報を処理した結果を光で表現している」

「それって、さっきおっしゃってた抽象思考の間接表現ですよ」

アンリが身を乗り出す。

「そのつもり・・だったんだけどね。どうやらまだ処理方法がまずくて、うまく思考を拾えないんだ。つまりは、今のところ単に気持ちを表示しただけに終わっているというのが正直なところだね。まあ、おかげで美由紀が不機嫌になったことだけは、すぐにわかるようになったけど」

「なんか、首に鈴をつけられたみたいで面白くないのよね。まあ、お互い様なんだけど」

「ゆくゆくは、拾った思考をD Iユニット同士で受け渡すことで共有できればいいなと思っ
ているんだけどね。まだまだ先は長いってのが現実さ」

「私はこれで十分よ。この上、頭の中まで読まれたらたまつたもんじゃないわ」

「以心伝心、つても悪くないと思うんだけどなあ」

「知らないでいられるから平和ってのもあるけど」

この二人は口論しながらも楽しそうである。ブレスレットの光り方もなんとなく同調しているみたいだ。

「面白そうですね。健太さん、よかったら今後、色々と情報交換させてもらえませんか？」
「ああ、望むところだ。こちらこそお願いするよ。君の研究も参考にしたいしね」

どうやら、アンリと健太は意気投合したみたいである。

「まったく、男って、どうしてこう研究とかの話になると子供みたいになるのかしらね」

美空が、なんとなくあきれ顔でつぶやく。

「そうそう。ほんとに子供よね」

と、美由紀。こちらも、なんとなく意気投合している。

「さて、一休みしませんか。この先、ちょっと大変になるかもしれないので」

脇からフランクが声をかけて、その場の話は一旦終了となった。それから、7人は壁の保管庫からブランケットと枕を出して、思い思いに横になった。

照明を少し暗くして、目を閉じたものの、フランクは、なかなか眠れなかった。不思議と不安感はないのだが、先行きが見えない中では、どうしてもあれこれと考えてしまう。メジャーな観光施設だし、こうした事故の可能性は当然ながら考慮されている。誰が中に入ったかもわかっているはずだから、不明者がいれば、このような場所にも搜索の手がのびるだろう。時間はまだ十分に残っている。悲観的になることはない。だが、最悪の事態も考えておかないといけない。その時は誰かが危険を冒してでも助けを呼びに行かなければならない。そうなった時、誰に託すのが一番いいのか。皆、自分が行くと言い出すだろう。はたして、誰が最適かの判断を冷静に出来るだろうか……。そのときは俺が……。そう思うと少し気分が落ち着いた。やがて、フランクも浅い眠りに落ちていた。

そして、どれくらいたっただろうか。静寂はいきなり、甲高いアラーム音で破られた。

「なんだ？」

フランクが叫ぶ。全員が飛び起きてあたりを見回した。

「待って。今調べるから」

サラはそう言うと、壁のパネルに駆け寄る。

「まずいわ。空気漏れみたい。酸素の減り方が予想よりだいぶ速くなってる」

「なんだって！ いったいどこから漏れてる。自動修復機能は働いていないのか？」

フランクが叫ぶ。こうした気密区画は、外壁が多重化されていて、どこから空気漏れが発生すると、自動的に壁の間に充填剤を入れて、漏れている箇所を塞ぐようなくみになっている。

「どうやら、環境調整ユニットの内部でリークしてるみたい。自動修復がきかない場所よ」

「あと、どれくらい持つ？」

「ちよつと待って。今の減少率だと・・・持って2時間くらいだわ」

「2時間しかないのか。それじゃ、すぐに何か手を打たないと間に合わないな」

「どうするの？ 外に出て修理する？」

「いや、このタイプの避難所の環境調整ユニットはパッケージ型だから、蓋を開けて修理というわけにはいかないだろう」

ダイブが横から口をはさむ。

「じゃ、どうするの？」

と美空。

「誰かが助けを呼びに行くしかないか」

と、フランク。

「でも、非常用エアシールドは、もう使えないぞ。みんな、ほぼ限界まで使ってしまったからな」

ダイブが言う。

「ああ、でも、避難所なら、ストックがあるんじゃないか？」

「そうね。探してみようよ」

美空はそう言うと言いつつ壁の収納庫を開けて中をのぞき込む。

「あった……。だけど2個しかないわよ。やっぱり、ここはメンテナンス中の待避所みたいね」

「それじゃ、二人で行くか？」

とダイブ。

「待てよ。非常用エアシールドは一個で10分しか持たないんだ。10分じゃ次の待避所までぎりぎりだぞ。途中、何かあったらアウトになる。一人が2個持って行った方がいい」

フランクが言う。

「でも、それじゃ、もし何かあったときのサポートがなくなるよね」

アンリが脇から割り込む。

「確かにそうだが、10分しかないんじゃないや助けを呼べる可能性が低くなる。結果的に全滅するリスクを考えると、やむを得ないんじゃないか？ ただ……」

「誰かにそれをやれ、とは言えないわね」

とサラ。

「そうだ。まあ、言い出しつぺの俺が行けばそれですむんだがな」

「ちょっと待て。それなら俺が行く。この先がどうなってるかはわからんだろう。力仕事がいるかもしれないからな。体力勝負を考えればフランクよりは俺の方が適役だと思うぞ」

フランクの肩を叩きながらデイブが言う。

「それは、確かにそうだが……」

「まあ、任せておけ。なんとか助けを呼んでくるさ」

デイブはそう言うと、支度を始める。

「気をつけるよ。ダメそうなら無理せずに戻ってこい。ここは少なくとも2時間は空気があ
るんだからな」

「わかった。そうするよ」

デイブはそう言いながらエアロックに向かう。しかし、デイブの性格は皆わかっている。限界になるまで戻ろうなんて考えないだろう。

「デイブ、念のためにコミュニケータの非常用ビーコンはオンにしておいてね」

サラが声をかける。最悪……なんてケースはあまり考えたくはないが、ビーコンがあれば、動けなくなっても誰かが見つけてくれる可能性がある。

「わかった。じゃ、行ってくる」

エアロックのドアが閉まってデイブが外に出て行く。待避所から離れてしまうと、直接の通信はできない。あとは待つしかないのだが……。

「大丈夫かな、デイブ」

アンリが心配そうに言う。

「わからん。でも、あいつの性格だ。無茶なことをする可能性は十分あるな」

「それは僕も心配だ。タイムリミットは20分。行くか戻るかの決断は10分で行かないといけないよね。それを過ぎたら、もう進むしか無くなるから」

「ねえ、何かバックアップする方法はないの？」

美空がフランクに言う。

「バックアップか。しかし、今手元にあるエアシールドはどれも、あと1、2分しか持たないから、外に出るのは難しいな」

「1、2分あれば、通信くらいは出来るんじゃない？」

と、サラ。

「そうか、残りの空気を使って、何度か通信はできそうだな。やってみよう。10分経過時点で連絡して、ダメそうなら戻らせる」

フランクは全員のエアシールドを集めると空気の残量をチェックしはじめた。

「使えそうなのは3個だけだな。あとはもうほとんど残量がない。安全を考えれば一回。無理しても2回が限度だ」

「それなら、ダイブが無茶しないように、状況を確認するくらいは出来そうね」

「そうだな。やってみよう」

ダイブが外に出てから既に7分ほど経過している。フランクはエアシールドを持つと、エアロックに向かった。

「気をつけてよね。ミイラ取りがミイラにならないように」

美空が言う。

「わかってるよ。とりあえず、うまく連絡が取れることを祈ろう」

フランクはそう言うと、エアロックのドアを閉めた。待避所からあまり離れなければ、壁越しでもなんとか通信はできる。フランクのコミュニケーターを全員で共有してダイブと話すことも可能だ。

「デイブ、聞こえるか？ フランクだ」

表に出たフランクがデイブに呼びかける。少し間があつて、応答が帰ってきた。少し息が荒れた感じの声だ。

「聞こえてる。よく通信できたな」

「ああ、エアシールドに残った空気を使って表に出ている。出られるのはこれ一回限りだろう。どうだ、そっちの状況は？」

「順調だよ。少し道は荒れてるが、もう半分以上進んでいる。洞窟の分岐点まであと200メートルってとこだな」

「大丈夫か。そろそろ10分だ。引き返すなら今だぞ」

「問題ない。この分なら余裕で次の待避所まで行けそうだ」

「そうか、それならいいが、気をつける。ここから先は何かあっても引き返せないぞ」

「わかっている。待避所に着いたら助けを呼んで、それから何か連絡手段を考えるよ」

「頼んだぞ。・・・そうだ。俺のコミュニケータを中継用に外に置いておく。着いたら呼んでくれ」

「わかった。もうしばらく待っていてくれ」

そろそろエアシールドの空気が少なくなってきたので、フランクは脇のベンチにコミュニケータを置くと、急いで待避所に戻った。

「なんとかかなりそうだ」

「そうね。まあ、デイブが正直に状況を伝えてたとして・・・だけど」

「そこまで疑ったらきりがない。あいつを信じるしかないだろう」

「確かに。とりあえず連絡を待つしかないわね。フランクのコミュニケータを経由して通信はできるから」

それからの数分は異常に長く感じられた。重苦しい空気の中で、全員が黙って連絡を待っていた。

「遅いわね。さっきの話だと、もう着いていてもいい頃じゃない？」

最初に口を開いたのは美空だった。

「たしかに。そろそろダイブが出かけてから20分だ。あいつは余裕だと言ってたから、もう連絡が無いとおかしい」

「サラ、呼んでみたら？」

「そうするわ。ダイブ、聞こえる？応答して」

サラが呼びかけるが応答がない。

「おかしいわ、受信反応がないのよ。コミュニケータが切れてるか、電波が届いていないみたいだわ。ビーコンも受信できない」

「まさか、何かあったんじゃない？」

アンリが心配そうに言う。

「連絡を忘れて待避所に入っちゃったとか？あいつ結構慌てものだし」

美空もそう言いつつ心配顔だ。サラが繰り返し何度も呼ぶのだが、まったく応答がない。一同は重苦しい雰囲気包まれる。

「そうだな。まだ何かあったと決まったわけじゃない。もうしばらく待ってみよう」

実際、何かあったとしても、自分たちに何も出来ないことは、フランクにもよくわかってい。だが、そのことがまた逆に不安を大きくするのだ。またしばらく一同は沈黙する。しかし、いつまでたっても連絡は無く、時間だけがどんどん過ぎていく。

「そろそろ1時間になるわ。いくらなんでも遅すぎない？」

沈黙に耐えられなくなったのか、美空が口を開いた。

「そうね。ダイブが無事かどうかは別にして、救援はあまり期待できそうにないわね。どうする？フランク」

サラも言う。

「どうする、と言われてもな。俺たちはここから動けないわけだし、とりあえず、酸素の消

費をできるだけ抑えて待つしかないだろうな。空気漏れだけでもなんとか出来ればいいんだが・・・」

「でも、環境調整ユニットの中じゃ、簡単には手を出せないわよ」

「配管を通して充填剤を流し込めないかな」

「それは危険ね。漏れている箇所がフィルターの先だと、フィルターを詰まらせてユニットそのものを壊す可能性があるわ」

「ちよつといいいかな」

それまで黙っていた健太が口を開く。

「フィルターや循環系のどっち側で漏れているかは、ユニットを一度止めてみればわかるんじゃないかな。吸い込み側と吐き出し側、どちらの配管から空気が漏れていくかで、ある程度判断ができるかもしれない。それがわかれば、ユニットを止めた状態で充填剤をミスト状にして、空気が出て行く側の配管に入れてやれば、漏れている箇所まで届くかもしれない。少量ずつ流せば周囲への悪影響も減らせるんじゃないかな。充填剤は真空に触れないと固まらないから」

「それ、いいアイデアですね。僕も賛成です」

アンリがすぐさま同意する。

「でも、そもそも、充填剤なんてあるの？」

と美空。

「普通なら予備のボンベがどこかに置いてあるはずだけど、最悪、取り付けてあるやつを外すしかないかもしれないな」

とフランク。

「たしか、さつき・・・」

美空が保管庫をのぞき込む。

「あった。これでしょ」

と小さなポンベを取り出す。

「よかった。それはあつたか。じゃ、早速……。サラ、環境調整ユニットを一度止めよう」
「わかったわ。やってみる」

サラが壁の管理コンソールに向かう。

「吸気口はここだな。でも、僅かな空気の流れをどうやって見るんだ？」

「それは僕に任せてくれ。たぶん、配管部にエアフローセンサーがあるはずだから、それを
使おう」

健太がサラの脇から管理コンソールをのぞき込む。

「そう、それだね。ユニットを止めた状態で空気の流れがどう変わるかを見るといいよ」

「じゃ、止めるわよ」

「了解。たのむ」

サラがコンソールを操作すると、空気の流れが止まる。ちよつと空気がよどんだ感じだ。

「どうだ？」

フランクが聞く。

「安定するまでちよつと待ってね……。うん、吸気側が負圧になってるから、フィルターの
手前だね」

「よし、それじゃ吸気口から充填剤を流そう。美空、たのむ」

「了解。じゃ、流すよ」

美空が吸気口の前でポンベのバルブを少し開く。シューと音がして吹き出した霧が吸気口に
吸い込まれていく。

「ゆっくり流しながら様子を見よう。変化が出たら教えてくれ」

「いまのところ変化なしね」

サラと健太がコンソールをのぞき込む。

「美空、一度止めて様子を見よう。流しすぎると後が面倒だ」

「わかったわ」

美空はボンベのバルブを閉じる。しばしの沈黙。またしてもちよつと重苦しい時間。空気が実際によどんでいる分、息苦しさが増す。

「まだ変化なしね・・・あ、ちよつと待って」

サラがコンソールをのぞき込んで言う。

「圧力が上がってきてる。効いてるみたいね」

「よし、いいぞ。美空、もう少し流してみよう」

「了解」

美空がまたバルブを少し開いて充填剤を流し込む。

「うん、だんだん上がってきたわ。もう少しで正常になりそうよ」

「よかった。これで、多少は時間が稼げそうだ。充填剤が落ち着くのを待って、ゆっくりと

循環を戻そう」

「了解。この分なら、あと2、3時間はなんとかなりそうだけど・・・」

「でも、あんまり余裕もないね。これからどうしよう?」

「それが問題だけどな。外に置いてあるコミュニケーターの非常用ビーコンは作動させてある。うまく見つけてもらえればいいんだが」

「デイブは・・・大丈夫・・・だよ。連絡さえ取れていれば、見つけてもらえるから」

デイブのことは気になる。しかし、自分たちも土壇場にいるわけで、まずはそちらをなんとかしないとイケない。とはいえ、ここから身動きが取れない状況では、出来ることはほとんどないのだが。

「いずれにせよ、俺たちは、酸素の消費をできるだけ抑えて、少しでもこの空気を長持ちさせるしかないさそうだ」

「そうね。覚悟を決めて、助けを待つかないか」

「待ってよ、このまま何もしないでここにいるつもりなの？」

美空が、少し声を荒げた。

「そりゃ、どうにかできるならしたいさ。でも、何が他にできる？」

「そりゃ、そうだけど……。もし助けが……。来なかったら」

「それは、あんまり考えない方がいいわね。てか、考えたくないよね」

「たしかに。実際、何をしても余計に酸素を消費して自分の首を絞めることになりそうだけど……。僕も、美空と同じでちょっと悔しいかな」

「そりゃ悔しいのは俺も同じだ。でも、待つしか無いんだったら、ダイブを信じて待たないか。少なくとも、あいつは命がけでどうにかしようとしてくれてるんだからな」

美空はまだ少し、何か言いたそうにしていたが、そのうち、あきらめたように床に座り込んで目を閉じた。その周囲に全員が腰を下ろす。何も出来ないのはわかっているが、過ぎていく時間を皆、もどかしく感じていた。なんとか気持ちを落ち着かせようとすればするほど、落ち着かなくなってくる。そんな重苦しさが限界に近づいた頃、突然、全員が軽い目眩のような感覚に襲われた。別の言い方をすれば、落下するような感覚である。

「何？これ」

「今、揺れた？」

美空とサラが叫ぶ。

「いや、重力が変化してみたみたいだ。どうやら補助重力が消えたみたいだな。本来の月の重力に戻ってるぞ」

フランクが言う。確かに、体がかなり軽くなっている。

「何が起きたの？」

「これは、システムの異常かもしれない。状況は思ったより深刻みたいだな」

美由紀と健太。

「重力制御がおかしくなるってことは、環境制御システムに何か深刻な問題が起きたのかも
しれないですね」

フランクが健太を見て言う。

「つまり、救援も難しくなってる・・・ってことなのかな」

アンリが不安そうに言う。

「もし、環境制御システムに何かあったとすれば、洞窟内だけじゃなくて、ここの施設全体
に影響があるだろうから、たしかに救援どころじゃないかもしれないな」

フランクが言う。

「つまり？」

と美空。その問いの答えは、皆がわかっている。

「そういうことよ」

サラが小声で言う。しばらく、沈黙があたりを支配する。

「だったら・・・」

美空がまた口を開く。

「だったら、ダメもとで悪あがきしようじゃないの。何もしないで、このまま最後を待つな
って私は嫌よ！」

美空が立ち上がって叫ぶ。

「落ち着け、美空。冷静に考えろ。この状況下で何をやっても、自分たちの首を絞めるだけ
だ。少しでも、時間を稼いで助けを待つのが最良の方法だとは思わないのか？」

今度はフランクが少し声を荒げた。

「理屈じゃないのよ。その時になって、何もしなかったことを後悔するくらいなら、何かや
って自滅した方が、いくらかマシだわ」

「でも、いったい何をするの？そもそも、何かできるの？」

サラも少しいらだっている。

「何か、何かできることはないの？本当にないわけ？私は嫌よ。こんなところで死んじやう
なんて。まだしてないことだってたくさんある。やりたいことは山ほどあるのに。どうして、
どうしてあきらめなきゃいけないの……」

美空は床に座り込むと泣き始めた。

「美空……泣かないでよ。僕だって悔しいんだ。でも、待つのが最善の策だったら、そう
するしかないと思ってる。だから……」

アンリが美空の横でそう言うのだが、美空は顔を膝にうずめて泣き止まない。皆、気持ち
同じだろう。だが、ここでヤケを起こせば、ほんの僅か残っているかもしれない可能性をも捨
ててしまうことになる。少なくとも理屈の上では、そうなのだ。みんな、ぎりぎりのところで
踏みとどまっている中で、一人が崩れれば全員がパニックになりかねない。その時、アンリが
美空の前にひざまずいて彼女の肩を両手で支えて言った。

「美空、僕はずっと君のそばにいる。何があっても……」

「僕には、それしかできないけど、でも一緒にいることはできるから」

「アンリ……」

「デイクを信じよう。僅かだけど、可能性に賭けようよ」

美空は顔を上げてアンリの目を見つめる。

「ずっと……私の？……でも、もう終わっちゃうかもしれないのに？」

「そんなことはまだわからないよ。もしそうだったとしても、最後まで一緒だから」

美空の肩を支える手に思わず力が入った。

「アンリ・・・」

このまま時間が止まったら……。たぶん二人とも心の中ではそう思っていたに違いない。



しばらく沈黙があたりを支配した、その時、

「おい、生きてるか？返事をしてくれ！」

いきなりコミュニケーターから声が聞こえてきた。

「デブか？」

「そうだ。待たせたな。今、そっちに向かっている」

「重力補正がおかしくなっているみたいだが、何があった？」

「ああ、それは俺が切った」

「なんだって？」

「実は、救援が思った以上に時間がかかりそうなことがわかったから、予備の酸素ポンベを持って行こうとしたんだが、思った以上に重くてな。それで、管理センターにたのんで、この一帯の重力を本来の月の重力に戻して貰ったってわけさ。おかげで、どうにかポンベ3本を運んでいる。あと5分くらいでそっちに行つて、まずはこれを取り付ける。ところで空気漏れはどうだ？そろそろ時間切れなんじゃないか？」

「そうだったのか。脅かしやがる。環境系が死んだのかと思つて覚悟を決めたところだよ。空気漏れの方は、とりあえず応急処置して止めたからもうしばらくは大丈夫そうだ」

「そうか、そりゃよかった。もうしばらく待つてくれ。とりあえず食い物も少し持つてきたから、宴会が出来るぞ」

沈んでいた雰囲気が一気に和んだ。これで最後と覚悟を決めていたのが夢のようである。

「まったく、デブの奴、そうならそうと先に連絡しなさいよね。。。って、あんたはいつまでそうやってんのよ！この変態っ」

そういうえば、アンリはまだ美空の肩をつかんだままである。我に返つたアンリは慌てて手を

離すと、思い切り赤面した。追い詰められていたとはいえ、自分が吐いた台詞を思い出すと、穴があったら入りたい気分になる。美空もかなりバツが悪そうだ。

「アンリ君、ナイトになった気分はどうかなあ？」

サラがすかさず冷やかす。それに先に反応したのは美空の方だ。

「ナ、ナイトなんて冗談じゃないわよ。もう、さっきのは全部なしね。なし！」

美空も真っ赤になっている。取り乱したことへの恥ずかしさもさることながら、アンリの言葉に一瞬、自分の心が動いたことを、なんとか取り繕うおうとしているようだ。

「あれ、なしでいいの？せっかく一生面倒見てもらえるチャンスだったのに？」

サラは容赦なく突っ込んでくる。

「一生って・・・それどういう意味よ。私は・・・私は・・・」

美空は必死に言葉を探している。一刀両断に否定してしまうのは簡単だが、そうしたくない気持ちはどこに残っているようだ。

「いいわ。どうしても一生私の面倒を見たいんだったら、私の下僕になりなさい！」

「げ、下僕？」

「そうよ、下僕！ なんでも私の言うことを聞くのよ」

「それってさ、奴隷とも言うんじゃない？いいじゃない。なっちゃんささいよ、この際だし」

サラは完全におもしろがっている。

「かんべんしてよ、二人とも・・・」

「アンリ、物は考えようかもしれないぞ。案外奴隷も悪くないんじゃないか？」

「フランクまで？はあ・・・まいったな」

「よし、決まり！今日からあんたは私の下僕。いいわね。あ、妙な気は起こさないでよね。あくまで下僕なんだから」

もう何でもいいから、この話は一旦終わりにしたい・・・そんな感じでアンリの下僕就任が決まってしまったようである。このポジジョンが冗談抜きで一生モノになるとは、アンリもこの時点では想像できなかったかもしれない。

それからしばらくして、ダイブが酸素ボンベを持って戻って来た。ボンベは無事取り付けられ、一同はのんびりと救援を待つことになる。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったけど、助かったぞ、ダイブ」

「こっちも時間切れになるんじゃないかとヒヤヒヤしたけど、間に合ってよかった。救援隊もなにやら混乱しているようで、最初、連絡すらうまくつかなかったから焦ったよ。たまたま、先の待避所で予備のボンベを見つけたのはラッキーだったな。あれがなかったら、かなり際どいことになっていたかもしれない」

「俺たちも、ほとんど覚悟を決めてたよ。でもまあ、おかげでちよつと面白いイベントを見られたけどな」

「面白いイベント？」

「そうね、あれはなかなか見物だったわよ」

「なんだ、何があった？」

「ちよつと。関係ないじゃない。何もなかったわよ」

「そうだよ。あれは・・・」

ダイブは、不思議そうな顔をしている。

「その二人に聞いてみたら？」

と、サラ。

「二人？ 何かあったのか？ アンリ」

「あ、いや、その・・・」

アンリは口ごもる。それもそのはずだ、アンリとダイブの間ではかなり微妙な事態である。美空にしてもこの事態の説明は難しいだろう。ダイブはちよつといぶかしげだ。

「ところで・・・、この空気漏れの原因はなんだったんだ？」

雰囲気を感じて話を換えようとしたのだろう。いきなりフランクが聞く。

「それなんだけど、情報が混乱していて、よくわからないんだ。工事中の洞窟の崩落事故じゃないかと言う話なんだけど。管理センターはその確認に、てんやわんやらしい」

「そうなのか。でも、それじゃ救援が来るのにまだずいぶんかかりそうだな」

「ああ、少しかかるだろうな。でも、近くから応援も来るようだから、それほど長くは待たされないんじゃないかな」

実際、それほど長くはかからなかった。一時間もしない間に、救援隊が個人用エアシールドを持ってやってきて、7人は彼らの先導で地上へのシャフトまで戻ることができたのである。地上に上がってみると、ロビーは人であふれていた。それもそのはずで、シャトルは先の事故以来、点検のため運航中止になっていたから、誰もここから帰れないのである。緊急で点検が終わった機体から順次運行再開するようだが、とてもこの全員を運びきれないため、乗客の多いコペルニクス方面へは、別途、エンジン付きの大型シャトルを手配中らしい。いずれにせよ、ここですばらくまた足止めである。

「それにしても・・・」

ダイブが口を開く。

「なかなかエキサイティングな探検だったな」

「まったく、月に着いてからというもの、ロクなことが起きないのは、いったい誰のせいかしらね」

美空がダイブを見て言う。

「おいおい、俺を見て言うなよ。そりや日頃の行いに自信は無いが、そりや皆同じだろう」

「あんたと一緒にしないでくれる？」

「まあ美空もあんまり言えないと思うけど。少なくとも私じゃないわよ」

「サラ、あんたね。裏切るつもり？」

「ま、結局、全員一蓮托生なんだけどな」

「だから、一緒にするなつての！フランクはそうかもしれないけど」

「まあまあ、とりあえず無事だったんだからいいじゃないか、美空」

「下僕は黙ってなさい！」

「ん？何だ？下僕って」

事情を知らないデイブが不思議そうな顔をする。

「あ、あんたにも言うておくわ。こいつは、これから私の下僕だから。あくまで下僕だけだね」

「そ、そうなのか？アンリ」

「い、いや、その・・・」

「こら、何を口ごもってるのよ。はっきりそうだって言いなさいよね」

「・・・」

「そ、そうか。下僕・・・か。まあ、頑張れよ」

「頑張れよってどういう意味だよ」

「そう言う意味さ」

デイブが笑って言う。なんとなくデイブも事情は悟ったらしい。しかし、下僕なんて意味不明かつ中途半端なポジションをどう考えればいいのか。デイブにとっても悩ましいはずなのに、少なくともアンリは、その先にチャレンジする権利を得たのだろうとデイブは考えた。そして、たぶんそれが美空的には優しさなのだろうと彼は思っていた。

「君たち」

健太と美由紀がやってきた。

「色々とお世話になったね。君たちが一緒に本当によかったよ」

「ありがとうございます。もう、この人と二人だけだったらどうなってたか」

「いえ。健太さんがいなかったら結構大事なところで困ってたと思いますよ。俺たちも助かりました」

フランクがそう言うと言わずに皆がうなずいた。

「これも何かの巡り合わせかもしれませんね。この先も、色々とおつきあいさせてもらえるとう嬉しいです。研究とかでお役に立てることがあったら遠慮無く言ってください」

「ありがとうございます、アンリ君。こちらこそよろしく頼むよ。君とは何か面白いことができそうだから。皆さんも、東京に来たときは声をかけてくれればあちこち案内できると思うから」

「是非、よろしくお願いします」

やがて、コペルニクス方面へのシャトル到着のアナウンスがあつて、待っていた人たちがゲート方面へ流れ出す。

「さあ、帰ろうぜ。腹も減ったし、帰ったら晩飯にしよう」

「まったく、食い意地だけは一人前なのよね。だからデブるのよ」

「ねえ、今夜は花火ないの？」

「サラ、それはやめてくれ。俺もちょっと忘れたい・・・」

「あれ、忘れちゃうんだ」

「おいサラ、それくらいにしとけよ」

サラはおもしろ半分だが、フランクが止めに入る。それから全員シャトルに搭乗。間もなくマリウスポートを離陸したシャトルは、あつという間にコペルニクス宇宙港に到着した。この大型シャトルはウエスト・リムには降りられない。最初に到着した時と同じように彼らはルナトレインをウエスト・リムまで乗り継ぎ、ホテルへと帰ったのである。



それからの数日は何事も無く、というか、ここまでの騒ぎに比べれば多少のドタバタなど些細なことのように思えるわけで、コペルニクス外輪山一周ツアーや静かの海のアポロ11号記念館巡りなど、とりあえず楽しく過ごした5人だった。もちろん、アンリは下僕として、さんさんこき使われて悲鳴を上げ続けていたのだけれど、それはそれで平和な時間だったと言いきだらう。

そして、あつという間に最終日。朝食後にホテルをチェックアウトした5人は、車でウエスト・リム駅へ向かう。地上部分の道路の周囲には、夜の月の景色。意外にも明るく感じるのは、ほぼ満ちた地球が空を照らしているからである。

「あーあ、もうお終いかあ。あつという間だったわね」

サラが空を見上げてつぶやく。

「楽しい時間は過ぎるのが速いって言うけど、本当よね」

美空は地球光で照らされた周囲の幻想的な景色をずっと見ている。

「そうだな。でも、誰かさんは長かったんじゃないのか？」

フランクがにやりと笑うとアンリの方を見る。

「はぁ……。確かにね」

アンリは、なんとなくお疲れ気味だ。ようやく帰れる、そんな雰囲気を漂わせている。

「仕方ないな。ご主人様のご主人様だからな」

デイブもそう言うのとアンリを見て笑う。

「なんか文句でもあるの？」

「あ、そんな訳じゃ……」

聞きつけた美空がアンリを見て言う。ここ数日は、すっかりこんな感じで、アンリも下僕モードが板についてきたようだ。

「お手柔らかに頼むよ、美空」

「それは、あんたの行い次第だから」

帰ったら新学期。附属高3年生は、アカデミー本課に進む準備もあって、何かと忙しい。これから一年、アンリがどんな状況に陥るかは、当人を含め想像に難くないのである。

やがて、車はまた地下に入って、間もなくウエスト・リム駅に到着する。

「そういえば、健太さんたちはもう帰っちゃったのかな」

「うん、春休みのうちにやっておきたい実験があるからって、昨日帰ったみたいだよ」

「なんかいい感じの二人だったわね」

「ああ、お似合いのカップルって感じだったな」

「アンリは連絡先を聞いているんだよな。またどこかで会えたらいいけど」

「美空は帰省したら会えるんじゃないの？」

「そうね。でも、あんまり家に帰る気もしないんだけどね。親がうるさいから」

「そう言うなよ。そのうち美空の家庭訪問をかねて、みんなで東京へ行ってみようぜ」

「あんたね。3年になったらそんな暇はないわよ」

「本課進級試験が終わった後で、卒業旅行ってのはありかもね」

「サラ、余計なことを言わないでよ。こいつら、本当に来そうだし」

「いいじゃないか。俺たちも一度東京には行ってみたいしな」

「あのさ。そろそろルナトレインが出る時間だけど・・・」

「うわ、ぎりぎりじゃない。あんたもっと早く言いなさいよね。気が利かないんだから・・・行くわよ。乗り遅れたら帰りの便に間に合わないし」

そんな感じで5人はホームへと走るのだった。



コペルニクス宇宙港を後に、5人を乗せたシャトルは一気に高度を上げていく。たった一週間だが、見慣れた灰色の景色が、どんどん遠ざかり、丸みを帯びた月の輪郭が窓から見えてくる。高度を上げるにつれ、月の輪郭が輝きを増し、やがて、シャトルは太陽の下に飛び出した。そして月の裏側を半周してからさらに加速して月軌道を離れる。あとは、途中のルナ・ステーションで加速されてから、地球の向こう側、150万KMのところにあるL2ステーションまでひとつ飛びだ。なにやら波乱の春休みだったが、5人はそれぞれに、なにかしら自分の変化らしきものを感じていた。この一週間の本当の意味を彼らが知るのはずと後のことだが、そこまでの話はまた機会があったらすることにして、このエピソードを締めくくろう。

では、またそのうちに・・・。